
クラウドの受難

アマノン ジャック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラウドの受難

【Nコード】

N4609M

【作者名】

アマノン ジャック

【あらすじ】

ディシディアのギャグ小説です。

コスモスの思い付きでアンケートをさせられた秩序組…その答えに腹を立てたコスモスはクラウドを脅すが…。

前書きにその話のキーワードとあらすじを入れたいと思います！

拙い文でスママセン。書きなれてないのでかなり汚いです。

12/22本編終了しました。短編をちよくちよく公開したいと思います。

注意事項（前書き）

今更ですが…先に書いておくべきでしたねOTL

注意事項

今回は私の拙い文章を読んで頂き有難う御座います。

読んで貰う前に…この話はギャグです。作者の思い付いた（酷い）ネタで構成されております。

そして結構重要ですが、キャラが崩壊しております。

特にコスモス…180。別人です。本編で敵しい彼女はきつと腹黒に違いないと思った結果…スイマセン間違えました。鬼畜でした。次にW O L…ブレまくりです。作者がブレた彼を見てみたいという結果がアレです。

あとはセシルとティナかな…

最後に「キャラがゲームのままじゃないと嫌」という方は引き返す事をオススメ致します。長くなりましたがどうぞ！

採用アンケート〜コスモス編〜（前書き）

元ネタはニコニコ動画の履歴書です。

〜キーワード〜

- ・カウントダウン
- ・シドが可哀想

採用アンケート〜コスモス編〜

「皆の者、今日和。え？私は誰かって？ディシディア影の主役にして…」

「ちょっとシド！時間無いんだから、さっさとしてくれない？」

コスモスがイライラしながらナレーター事シドを急かした。

「ああ、すまない。では始めるか…」

深呼吸して息を吸い込み、司会者口調で…

「FFファンの皆さん、今日和！今日のゲストは秩序組のリーダーにして保護者のコスモスさんです。」

「ども！」

「それでは秩序組について聞いたのでボードを見てみましょう。」

ボールの被ったボードが二人の前に現れる。これはコスモスが事前に答えを書いている状態だ。

「ボール、オープン！」

シドの掛け声と共にコスモスの皆に対しての採用理由が露わになった

WOL:ブレ(デレ)ない

フリオ:私だって薔薇に囲まれたいわ

ネギ：最年少

セシル：パラディンはイケメン

バツツ：20歳の少年

ティナ：唯一の紅一点かつ美人だから

クラウド：ツンツン頭

スコール：ライオン

ジタン：実は常識人

ティーダ：ムードメーカー

シャントット：何で採用したのか解らない…

「…。」

「おい、何か喋ろや司会者。」

「…いや、何と言うか結局の所は“顔”で採用してらっしゃいますね。」

「当然よ！美しいって良いわよね　まさに女神の私にピッタリ！」

「あはは。だから秩序組の方々に引かれるんですね？納得！」

「…今、何て言った？」

上機嫌だったコスモスがシドの発言に目を光らせた。

「うえ？ギヤアアア！暴力反対。」

「ちよつと！聞いてないわよ！！あの子達にアンケートを採ったなんて！！！」

アンケートはコスモスが暴れた為に一時中断となった。

「…では気を取り直して、今度は秩序組から見たコスモスについて

聞いてみました。」

「早く答えが見たいわね。」

「…お前が暴れなきゃスムーズに進んでた…うわ、冗談だって！では、時間も無いので答えオープン！！」

ボールを被ってないボードが出てきた

WOL：愛しの我が妻

フリオ：…ゴクリッ

ネギ：母が居たらこんな感じかな

セシル：ローザ（4ヒロイン）の方が美人

バツ：そんな事より旅とか面白い事しようぜ

ティナ：あんな女性になりたい（遠い目）

クラウド：興味無いね〜

スコール：壁と話してろ

ジタン：今度デートしようぜ

ティーダ：親父を秩序側に返せ

シャントット：腹黒女神

「何よ！アイツら、ふっざけんじゃないわよ！..」

（あんだけ自己中でSなんだから自業自得だろうに…）

「何か言ったシド？」

「いや、別に…（秩序組の奴らが）大変だな。」

口には出さなかったが秩序組に同情するシド。そつとも知らずに…

「でしょ？私はこんなに頑張ってるのに…特にクラウドめ、興味無
いてどういう事よ！全く…ネギも普通、其処は“お姉さん”でし
よ！！空気読みなさいよね。」

（お前がな。）

「シド、その鼻をへし折って倒して蹴り上げるわ〜よ？」

歌いながら告げるコスモス。

「C o c c oのカウントダウン！死への秒読みじゃ…」

「あれ？シドとコスモスじゃん…何してんの？」

何も知らないオニオンナイトが二人に声を掛けてきた。オニオンナ
イトを見かけるやコスモスが歌いながら近付いていく。

「3つ数える間に天使に会える…」

「？」

「オニオンナイト、何をしてる！さっさと逃げ…」

「3・2・1…」

またしてもコスモスが暴れた為に撮影は中止になった。

「ふう、お前な…幾ら答えがアレだからってな落ち着けよ…」

「だって、私はあの子のオカンじゃないもの。」

オニオンナイトを殴り終えたコスモスの衣装は血で赤黒く染まっ
ていた。

「なあ、仮にも女神なんだから着替えて来い。」

「はあ？“仮”って何よ？失礼ね！もう時間無いから良いわ…それ
にど〜せコレ筆談でしょ？姿が写る訳じゃないし。」

「（駄目だ…この女神。）では、気を取り直して…今度は敵の混沌組の方々にも採ったので答えをどぞ！」

「また…私、聞いてないんだけど…」

コスモスの意見を見無視してボードがオープン

ガーランド：初恋の人にそっくり

皇帝：我が人生の出汁

暗闇の雲：あゝいう格好って動きにくくない？

ゴルベーザ：幸薄そうではとけない

エクスデス：“無” 関心

ケフカ：ティナを奪われた

セフィロス：興味無いからそれよりクラウドに会わせr y…

アルティミシア：もつと露出して良いんじゃない？

クジャ：哀れな女神

ジエクト：ティータは元気か？

ジャッジ：返り討ちにされた（シャントットに）

「ああ、腹立つ！コイツら…好き勝手に言いやがって…！くそ、ボード貸さない。」

「…。コスモスさんが忙しいようなので一旦休憩です。」
三度目の中断。

「コスモスが答を書いたみたいなんで…もうボード出して。」

ボードが出てきた

ガー：よく見るとお茶目さん

うぼあゝ：てめえの出汁なんざ誰になるかボケが

痴女：まず服装整えろよ：コレだから中途半端は

ゴル兄：紳士

先生：うちの子達によく虐められてる人

ピエロ：化粧剥いでやんよ！

いか：ストーカーは犯罪

魔女：引きこもりは引ッ込んでろ

ぬこ：周りをよく見てごらんなさいな？

親父：ティナとトレードしてゴメンね

負け犬：あんな破壊人に立ち向かうとは命知らずw

「お前、コレ：混沌組の奴らがあだ名になってるじゃないか！書き直せ！！」

「嫌よ、知らないわよ！もう腹立つから帰る！！」コスモスはシドから去っていた。

「えゝ、ゲストが帰ってしまったので番組を終わらせて頂きます。次回はカオスさんです！では、また！！」

番組が終了し：

「ふう：あの女神め。」

「貴様か：コスモスを泣かせたのは？」

WOLがシドの前に現れた。

「はあ？」

「仲間を侮辱した罪は重い…散れ！」

「ギャアアア！」

攻撃をし始めるWOLにシドは無我夢中で逃げていた。

採用アンケート〱コスモス編〱（後書き）

今更ですが、載せました。つゝか私は何故初めに載せなかったんだろ…

受難は此処から（前書き）

ギャグ、キャラ崩壊注意。

くキーワードく

- ・興味無い
- ・写真

受難は此処から

「興味無いって…ストーカーに追われて匿ってるのは誰だ？」

コスモスがクラウドに向かって問う。思い付きで考えたアンケートで自分に対しての意見にご立腹のようだ。

「アンタに頼んでない。」

クラウドは興味無さそうに答える。すると…

「ふゝん…そんな事言うんだ…」

意味ありげに笑うコスモス。

「じゃあコレなんだ？」

コスモスの手にはクラウドが女装した時の写真があった。

「！？どっ…何処でそれを？」

「えっと銀髪の髪長い刀の人が大事そうに持ってたから貰っちゃった（強奪）」

「あの野郎…俺の唯一の汚点を…しかも寄りによつて渡っちゃいけない奴に持ってたかてるし…」

「どういう意味よ？あ、そうだ！バツがアンケートに面白い事を探してたから見せてみたらどんな反応するかしら？うふふ…楽しみ」

コスモスはクラウドから凄い勢いで離れていた。

「頼むから俺の生き恥をまき散らさないでくれ！」

その後：クラウドはコスモスの後を追ひ、ご機嫌を何とか取り写真はバツツに見せられずに済んだが、コスモスで会う時でのみ女装をさせられてしまいクラウドの受難は続くのであった…

目撃者（前書き）

クラウドがコスモスと二人で会ってる所を偶然目撃した人物が…

〈キーワード〉

- ・ 目利き？
- ・ 腹黒女神

目撃者

「なあ、コスモス…あの…」

「どうしたの？ジタン？何か用？」

ジタンがコスモスに気になる事を聞いた。

「あの…たまに来る娘居るじゃん？誰？」

「…知りたい？知りたい？」

コスモスはこりや面白くなってきたと言わんばかりにジタンに聞いた。

「うん。すげえ可愛い。綺麗な金髪と紫のシルクのドレス…ちょっとガタイが良いけど健康的で素敵だと思う。」

嬉しそうに話すジタンに別の意味で嬉しそうなコスモスはジタンの目撃を関心した。

「よく見てるわね」

「俺、一応盗賊だから目利きなら任せてくれよ！…あの娘誰？」

少し、考え込むコスモス。

（そういえば、名前考えてなかったな…それに）

顔を上げジタンを見て、

（今教えるのも楽しいけど、もう少し後の方がもっと楽しいよね？）

心の中で黒い笑みを浮かべながらジタンに適当な言い訳をする。

「うーん、彼女とてもシャイだから話してる私にも名前教えてくれないの。」

「へえ」。確かに遠目で見ても恥ずかしそうにしてたな。何かますます興味湧いたぜ！なあ次会う時に紹介してくれよ？」

「私はむしろ紹介したいんだけどね？もう、本当に。今すぐに。でも一応また会った時に聞いてみるわね？」

「あゝ、宜しくな！」

こうして雲の受難は本人の知らない内にどんどん広がっていくのであった。

それぞれの反応（前書き）

クラウドはコスモスに呼ばれ例の如く女装して彼女の元を訪れた…

～キーワード～

仲間1～6はプライバシーの為に名前を伏せさせていただきます。

それぞれの反応

「今日呼び出したのはジタンが“貴女”に会いたいんですって？会えは？」

軽く言うコスモスにキレるクラウド。

「良い訳ねえだろ！っ！か何でそんな適当なんだよ！！」

「え？“男”らしく、堂々と会えば良いじゃない？大体：他の仲間達には好評だったわよ？」

「男らしくって…ん？」

一旦区切り…コスモスを問い詰める。

「ちょっと待て！他の奴らも何故知ってる？」

「あら？何でだったかしら？」

コスモスは思い出し（笑い）ながら他の仲間達の反応を話した。

―回想―

仲間1：「…ゴクリ！」

仲間2：「え？誰なんすか？このガタイの良い娘！可愛いっすね！！」

仲間3：「見た事無い娘だな…もしやカオスの手先ではあるまいな？もしそうであれば私が全力で斬る！」

一旦回想は終了し、クラウドは呆然とコスモスを見る。

「だって？ほら好評でしょ？」

クラウドの女装写真を手でヒラヒラさせながら答えるコスモス。

「アホか！アンタ！！何、俺の写真を他の奴に見せてんだよ？正気か？つゝか内１人間違いなく敵意じゃね〜か！！！」

「大丈夫！私から彼にはちゃんと私の味方って伝えたから！！あ、今思い出したんだけど…他の仲間達も見せたんだった」
てへっ…としながら平然とバラすコスモス。

「え？まだ見せてんの？」

戸惑うクラウドを無視して再び話す。

―回想再び―

仲間4：「……。」（絶句しつつ心の中で不憫だと思ってる。）

仲間5：「うわぁ…美人さんですね？」（取り敢えず誉めつつ、不憫だと思ってる。）

仲間6：「…可哀想に。」（ガキなので正直に答えた。）

回想が終了し満面の（邪悪な）笑みをしたコスモスが…

「ね？」

「ね？…じゃね〜だろ！コイツら明らかに俺だって気付いてんじゃね〜か！！！」

「スコールは絶句するほど美人って思ったのよ…きつと！セシルだって誉めてるじゃない？ネギのは多分照れ隠しよ！！！」

「絶対違うと思うし…兎に角この格好でジタンには会わないからな！！！」

すると、その言葉を待っていたかのようにコスモスは最悪な提案を告げた。

「まあ、そう言うと思って代わりの人を連れて来たわよ？」
「何だと？」

果たしてコスモスの連れてきた人物とは？

次回に続く。

番外編：とばかり（前書き）

ちよつと番外編。

くキーワードく

- ・小学生並みの兄弟喧嘩
- ・怒って当然な弟

番外編：とばっちり

「クラウドも似合ってるし、貴方もしてみr y…」

「丁寧にお断りします。」

凄く困った顔でやんわりと丁寧に断るセシル。

「ちょっ…イントロクイズじゃないし…最後まで話を聞きなさいよ！貴方なら絶対似合うと思うんだけど…」

コスモスはセシルの白騎士姿を見ながら褒める。

「それ嬉しくないんですけど…僕、用事があるんで、もう行って良いですか？」

早くこの場を去った方が良さそうだと思ったセシルはこれ以上コスモスに付き合いたくないので去ろうとした。

が…

「用事って…“コレ”の事じゃないわよね？」

コスモスの後ろにいつの間にかゴルベージが居た。

「兄さん？あれなんで此処にいるの？」

「実はな…セシルよ、コスモスから聞いたのだがお前…女装をするらしいな？」

全く身に覚えの無い事をゴルベージに言われセシルは戸惑った。

「言っていないよ。コスモス、兄さんに何を吹き込んでんの？」

「貴方のお兄さんがどうしても“可愛い妹”を見てみたいって言うから…つい」

てへっ…と悪びれも無く言うコスモス。

「何…妹って？僕は弟ですよ？頭、大丈夫ですか？」

「セシル…我が妹よ」

その一言でセシルの堪忍袋の緒が切れた。

「お前は暫く黙ってる。何が妹か！このバカ兄貴！！」

セシルの言葉にゴルベータは静かに怒る。

「…何だと？貴様、兄に向かって何て口を利いてるんだ！」

「弟の性別を間違ってる時点で兄じゃねーよ！」

「仕方無いじゃないか…私だって本当は妹が欲しかったんだから！大体その顔が悪いんだぞ？中性的で。」

「悪かったな！中性的で！！てめえなんか鎧で顔すら見えてねえだろ？本当に僕の兄さんですか？エクステスとかガーランドじゃないよね？…僕の兄さんは優しいんだ！お前なんか僕の兄さんじゃない！！」

一気に撒くし立てられゴルベータは更に怒る。

「…実の兄を否定するとは…反抗期だからって言って良い事と悪い事があるだろ？もう良い！失望したぞ、セシル。お前とは縁を切る。…さらばだ」

「もう二度と来るな！」

こうして兄はカオス側につき弟はコスモス側につき兄弟喧嘩は収まったとか収まらないとか…

「あれ？私のせい？まあ良いか 喧嘩するほど仲が良いって言うしね？」

コスモスは取り敢えず自分のせいでは無いと思ってる。

クラクラにしてやんよ（前書き）

前回、コスモスによって女装の写真が見られたクラウド。そんな中、足音が近付いてきた…

～キーワード～

- ・素と地
- ・アルプス
- ・傷が増えました

クラクラにしてやんよ

「あら？来たみたいね？」「何？（バツかティナかどっちだ？出来ればティナが良い…アイツなら気付いても話さなさそうだ…頼む！神様！！）」

目を瞑って両手を合わせ祈るクラウド…

「“神”様なら目の前に居るじゃない？」

「黙れ！邪神め！！…っ！お前は？」

コスモスとクラウドの前に居たのは…

ティナだった。

「コスモス…用事って何？新しい娘が入るって聞いたけど…」

キョロキョロと辺りを見回すティナ。

「本物の神様、有難う。」（小さい声で）

「聞こえてるわよ？そこ！…それより来てくれて有難うティナ。紹介するわね。クラウドがストーリーカーに襲われて廃人になったからクビにして新しくこの娘を入れたの。」

「廃人って…明らかに過去を暴露してんな。オイ！」
「？」

ティナがクラウドを見ながらキョトンとしている。気付いたクラウドは慌てて“女”らしくする。

「あつ！…おほん！！そんな事より名前はコスモスから言つてよ。私、恥ずかしくて口が回らない。」

正体はバレてなさそうなので役に徹してみるクラウド…

「そうね。 “クラウド” なんてどうかしら？」

「…クラウドって！アルプスの少女ハイジか！！…まさかお前、ハイジ…廃人と掛けてその名前を選んだじゃ？」

「ま・さ・か！そんな事無いわよ。素敵な名前ねクラウド…ぷぷつ。」

クラウドもといクラウドを見て噴き出すコスモス。

「アンタ、今笑つたろ？さては掛けてたな！」

「まあまあ。そんな事より言葉遣いを直さないかね？クラウドちゃん？」

「はっ！」

ティナを見たが無表情で何を考えてるか分からない。

「……。」

黙つてクラウドを見るティナ。

「あら…ゴメンナサイ。私つたら…コスモスの前ではつい“素”が出ちゃうの。」

「“地”の間違いでしょ？」

「黙らっしゃい！…あらヤダ。ただだわ…ゴメンナサイ。初めまして、クラウドと言います！宜しくね。ティナさん。」

そう言つて手を差し伸べたクラウドだが…

「…な…で。」

「?…ティナさん?」

差し伸ばした手を弾き拒絶される。

「来ないで!…クラウド、貴方…私がコスモスサイドで女一人だからって気を使ってくれるのは嬉しいけど…間違ってるわよ。」

沈黙。

「…いつから気付いてた?」

「初めからよ。でもどうして女装する必要があるの?クラウドはそのままが良いじゃない!」

「…いや、これには訳があつry…」

「もう良い!クラウドなんて大ッキライ!」

「え?ちよっ…!」

ティナはクラウドとコスモスから離れていた。誤解が出来てしまいクラウドの心に新たな傷が生まれてしまった。

俺、参上。(前書き)

ティナにあらぬ誤解を掛けてしまったクラウド…誤解は解けるのだからうか？

くキーワードく

- ・女優クララ
- ・コスモスの珍しいツツコミ
- ・人の話を聞かないWOL

俺、参上。

「……………」
「……………」

ティナが去った方向を見ながら沈黙する二人。

「何か、言いたそうだな。話せよ。」

沈黙に耐えられなかったのかクラウドが口を開く。すると…

「…じゃあ、遠慮無く。泣かした、泣かした。WOLが来るぞ。」
「え？」

その瞬間、クラウドは凄い殺意を感じた。あの男…WOLが斬りかかってきたのだ。

「お前は仲間を侮辱した。…斬る。」

「ちよつと待て！誤解だ。訳を話そうとしたらあっちが行ってしまったんだ！！こつちだってコスモスに言われてやったんだ！！！」

斬りかけてた剣を引っ込めるWOL。

「…なるほど。そういう事か…」
「解ってくれたか。良かったry…」

クラウドが安堵した束の間、WOLがまた斬りかかってきた。

「…貴様が、コスモスを盾に言い訳する酷い娘という事はよく解った。カオスの手先め！私が斬ってくれよう！！」

「何で、そうなるんだ！おい、コスモス。コイツに俺の写真見せた時何て説明した？」

WOLの剣を交わしながらクラウドはコスモスに聞いた。

「今は私側だけど、いつあっちに寝返るか解らないって言った。」

あっけらかんと答えるコスモス。

「お前！だからコイツ俺に敵意を持ってたのか！！…もう一つ聞いて良いか？ティナには何て説明した？」

少し考えて、

「うーんと。ティナが女の子欲しいって言うから…敵はオバサンしか居ないでしょ？同年代って言うって居ないし可哀想だから“女装癖”のある貴方を選んだの！」

“女装歴”はあるが、“女装癖”は無い。あと可哀想なのは寧ろ俺だ。…で、アンタはティナに女の子を紹介するって言った訳だ。

あのな、俺の体格見たら解るだろ？女じゃないって。どうしてそう誤解を作るかな？」

「喜ばせようと思って…」

「誰を？」

何となく答えは予想は着いてるが聞いてみるクラウド。

「私を」

「ヤッパリか！アンタは…ってそれよりこの剣バカ（WOL）を

止めてくれないか？」

WOLの一方的な攻撃を避けながらクラウドがコスモスに願う。

「え？無理。ソルジャーなんでしょ？自分で止めなさいな？」

「…アンタ、もう少し自分が何してくれてんのか考えてくれ。つか女装してる時点で持ってるねえよ…剣。」

「7の時は持ってたのに…何だよ？」

「演技は形からだ。女が刀を持ったら物騒だろ？」

「アンタは女優か！」

WOLの攻撃を交わしつつコスモスと余裕で話す雲であった。

ビリビリのドレス（前書き）

WOLの一方的な攻撃を華麗にかわしてたクラウド…だが履きなれないスカートのせいか動きが段々遅くなり…遂に追い詰められてしまい…

くキーワードく

- ・黒クラウド
- ・青鬼

ビリビリのドレス

「ちきしょ〜。これまでか…」

ビリビりに破れた衣装、着なれない服装のせいで動けなくなっ
てしまったクラウド。

「やっと観念したか。カオスの手先め。」

「くっ！（もう駄目だ…俺この格好で死ぬのか？うわ…ヤダな。鳴
呼…このドレス高かったのにな…万ギルして買ってローンもある
のにな…鬘もあのヘアスタイルに合うのをやっと思つたのに…下
着だつてオーダーメイドなんだぞ…ん？あれ？何だろ…段々腹立っ
てきたな…）」

黒いオーラがクラウドを包み込む。

「最後に言い残す事があれば聞いてやろう。私も鬼じゃない。さあ、
言うがいはry…」

WOLの頬に一筋の傷が出来る。

「…めえ…ぜ…い…ろ…」

「？」

「てめえ絶対殺す！」

クラウドはスカートからナイフを出しWOLの頬を斬りつけたのだ。

「形からは何処行つた！」

「うるせえ！俺はコイツのせいでお金がパーなんだよ…！…ドレス

を破りやがって…」

ドレスのスカートを持ちWOLに言う。

「お前が動くからだろ。私のせいにするな！小刀を隠し持っていたとは…往生際の悪い奴め。」

「お前のせいだろ？何が鬼じゃないだ！人の話をロクに聞かずに斬りかかった癖に…！お前はいつもそうだ。自分がリーダーだからって他人の意見を真つ二つにして自分かコスモスを優先して…俺らがどれだけ苦労してると思ってただ…！！衣装が青いだけに血が通ってないんじゃないのか？この青鬼…！！！」

青鬼と言われWOLが怒る。

「…！貴様、仲間やコスモスだけでなく…この私をも侮辱する気が…！！」

「侮辱？事実だろ。ああ…忘れてた…角も生えてたっけ？益々、青鬼だな？…ククク。」

兜の角を指差し嘲笑うクラウド。

「生えてない！これは兜だ…！見て解るだろ？全く女ともあろう者が無礼な言葉を吐きおって…」

“女”と言われ更に笑い出すクラウド。

「女？俺が？アンタ、本当に血が通ってないんじゃないのか？頭に…」

「どついう意味だ…！もう許せん。絶対殺す。」

「売られた喧嘩は買ってやるよ！かかってきな…！」

救世主（前書き）

前回、一度は立て直したバトル。だがやはり履きなれないスカート
のせいで、またも窮地に陥ったクラウド。そんな彼に救いの足音が…

くキーワードく

・猿

・遂にWOLが…

救世主

「私を侮辱した罪は重い。潔く死ね。」

余程頭に來たのだろうWOLはすぐにも斬りかかろうとしていた。

「ちっ！この格好じゃなかったらブレイクしてEXモードでシバけたのに！！」

「問題無用！斬る。」

剣がクラウドの頭に着こうとした時、救いの足音が…

「WOL、お前女の子に手を出すなんて見損なつたぜ！」

「ジタン！何故此处に？」

「コスモスに呼ばれたからだよ。今日は…その…兎に角だ！女の子を傷つけた罪は重いぜ？」

ジタンがクラウドを庇うようにする。

「女であれば、カオスの手先も庇うのか？お前の範囲はバリ広だな。」

「女でも斬るようなお前に言われたかねえよ。女性に優しく…これが紳士の掟」

「ふん！女なら誰でも尻尾振る猿が！！だからお前は甘いのだ！！！」

「俺が甘ちゃんなら、敵に非情のアンタは青鬼だな。」

二度目の屈辱。WOLは怒りに震えていた。

「くっ…！二度も私を侮辱しおつて！！貴様ら絶対斬る…ん？あの娘は何処行つた？」

さっきまで居たクラウドがいつの間にか居なくなっていた。

「さあね？おつかない青鬼に襲われて逃げちゃったんじゃない？」

「…三度目だ。いや、四回言われた…そのセリフ…まあ良い、貴様の息の根を止めてやる！」

剣をジタンの方に構い直し、WOLが襲ってくる。

「ああ…頭に完全に血上ってんな…はあ、適当にやり合って俺もとんずらしょ。」

ジタンの助けにより何とか逃げたクラウド。彼はいったい何処へ向かったのか？

「あんにやろ、上手く逃げやがって。」

クラウドの手際の良さに毒づくコスモスであった。

クラウドをたずねて三千里（前書き）

クラウドを探してるコスモス。そこに…

〈キーワード〉

- ・ ティナが可愛いのは此処まで
- ・ 性格がハンパなく悪いコスモス

クラウドをたずねて三千里

「ねえ。コスモス…クラウドは？」

コスモスがクラウドを探しているとティナに出会った。

「あら、ティナ。クラウドなら私も探してるんだけど…全く何処行つたのかしら！」

「…そう。あのね、コスモス…私さっきの事謝ろうと思って…」

「謝るって？どうして？」

さっきとは違い落ち着いてるティナ。

「私ね…一人になって考えたの。クラウドはクラウドなりに私の事を励まそうとしたんだって…そう思うと私、悪い事したなって…」
「そんな事無いわよ。誰だってあんなガタイの良い男が女装したら怯えるわよ。貴女のせいじゃないわ。」

コスモスが優しくティナに言う。元々、コスモスのせいなのだが…

「もしかすると、私を楽しませようとしたのかもしれない。…うん。ゴメン。聞いてくれて有難う。私探してみるね！」

「ああ、ちよつと…」

ティナはコスモスの元を去っていた。

「もう！まだ誤解したままなら楽しかったのに…つまんねえ！！」

クラウド本人が居ない間にティナの機嫌は直ったが新たな誤解を生んでしまったようだ。

クラウドをたずねて三千里（後書き）

次回から過去編に入ります。

過去編：秩序組の受難＜前編＞（前書き）

話は過去に戻り、コレはティナとジェクトをトレードする前の話。

ネタバレを書くとき、ティナはカオス側でジェクトはコスモス側だったそうです。（皇帝談）

（キーワード）

- ・異性に弱い秩序組
- ・究極の二択

過去編：秩序組の受難＜前編＞

「カスオ達は意外に強いですわね。コスモス、このままでは我が軍は負けてしまいますわ。何か良い手はありませんの？」

シャントットが苛立ちながら話す。秩序組は負けてばかりなので腹が立ってしまうのだ。

「そうね。あつち女3人だものね。やっぱり手を抜いてしまうのかもしれないわね。…あ、そうだ！」

「！…何か閃きましたの？」

コスモスはシャントットに耳打ちした。

「それは良い考えですわね。楽しみですよ…おっほっほっほ！」

シャントットの高笑いが周りに響いた。

―数日後―

「さて、皆さんに今日は大事なお話があります。」

コスモスにしては珍しく真剣な口調だった。

「何すか？話つて？」

ティーダが落ち着かない様子で聞いた。

「おい！ティーダ、落ち着け。今から話す所だろ？」

隣に居たフリオニールがティードを制する。静かになった所でシャントットが口を開いた。

「おほん！宜しいかしら？…我が軍は窮地に立たされておりませうね？そこで私とコスモスは話合いましたの。」

「…で、秘策は？あんだろ？」

ジエクトがやや面倒そうに言った。

「ええ！では心してお聞きなさいませ。さあコスモス。」

「私たちは敵の色仕掛けに弱い…だったらそれに対抗すれば我が軍の勝利は確定です。」

その意見にバツツが…

「おいおい。確定って自信たっぷりだな。」

「ええ。だって貴方達は今から女になるんですもの。」

「……………」

暫くの沈黙。

「…はっ？」

オニオンナイトが思わず疑問を口にしてしまった。

「だから、貴方達は真の女の子になるのです。」（……何？コレ？罰ゲーム？）

…とは、男衆全員の疑問。口には出さないが皆思ってしまう。

「さあさあ！衣装は用意してありますわ！！さっさとお着替えあそばせ！！！」

「いやいやいやいや！」

男衆全員否定。ジタンが皆を代表して抗議する。

「おかしいだろ？何で色仕掛けに対抗するのに女装なんだよ！」

「真っ先に引つかかる方に言われたくありませんわ。良いですか？貴方達が頼りないせいで私達はどれだけ負けてると思ってますの？」「だからってそれは無いだろ。いくら何でも……」

バツもジタンの抗議に参加した。

「ええい！お黙り！！もう面倒臭いですわね……」

すると、シャントットが抗議に腹を立て悪魔のような二択を男衆に提案（というか強制）しだした。

「では、こうしましょ。私の実験体になるか女装するか……どちらが宜しくて？」

「女装が良いです。（何この究極の選択！）」

哀れ男衆。どちらを選択しても彼らには地獄だった。

「宜しい！ではコスモス……我が軍のチーム名を発表しなさい。」
（チーム名って……何だ？）

“チーム名”という言葉にざわめく男衆。

「はい。では我が軍が12名なので、女子十二楽坊で！」

「楽器は？」

男衆コスモスに質問。しかし答えたのはコスモスではなく悪魔の笑みを浮かべたシャントット。

「何を仰つてますの？お持ちでしょ？立派な武器…」

「ええええ〜！」

男衆の悲鳴がこだました。

こうして、女子十二楽坊はカオスに対抗するのであった。

中編へ続く。

< 中編 > (前書き)

戦に負けてばかりのコスモス側。今回は女装で勝負するという無茶振りを言い始めた。果たしてこの戦い… 吉と出るか凶と出るか…

今回バトルが3つあった為やや長いです。

〈 キーワード 〉

- ・ 仲間割れ
- ・ 魔女のとある疑惑

< 中編 >

カオスの居る地に足を踏み入れたコスモス軍。

「ふん！来たな…哀れな人の子どもが…」

カオスがコスモス軍に気付き鼻で笑う。

「どくせ死ぬただだよ？もう大人しく壊されちやいなよ？」

カオスに続きケフカが笑いながら言う。エクスデスもケフカに習い…

「そうだ。無に帰してやろう。ファファファ…ファ？」

カオス軍がコスモス軍の面々を見て凍り付いた。

「うふふ…。どう？生まれ変わった我が軍の姿は？美しすぎて言葉も出ないかしら？」

コスモスがカオス軍に向かって言い放つ。

「おっほっほっほ！我が軍、女子十二楽坊が貴方達を成敗してあげますわ。覚悟なさいませ！！」

シャントットがカオス軍を指差しながら言う。

「…古っ！パクリだし…楽器は武器かよ！！物騒な十二楽坊だな。」

カオスがツツコミと感想を漏らす。

「ツツコミそこかよ！…貴様ら何てはしたない格好を…見損なったぞ。」

ガーランドが上司にツツコミつつもコスモス軍の変わり果てた姿を見て憤慨する。戦闘好きな彼にとって女装は許せなかったらしい。

「ならば、お前は選べるか？実験体になるのと我々と戦うのと…」

ガーランドの宿敵であるWOLが泣きながら訴えた。

「…うん。ゴメン。おじちゃんが悪かった…泣くな。解ったから！戦うから…！」

「ガーランド。貴様、こんな得体の知れない奴らに何故戦いを申し込む？」

皇帝がコスモス軍を信じられない形相で見ながら同僚であるガーランドに抗議する。

「察してやれよ。メデューサが！頭の蛇に全知能持つてかれてるんじゃないか？」

「そうですよ。戦いにも礼儀があるのですよ？」

アルティミシアもガーランド同様コスモス軍に同情する。

「アルティ…お前まで！…つかガーランド！！何気に悪口言っとな。身内だろ？」

皇帝が必死に訴える。だが、ガーランドは皇帝の訴えを鼻で笑い…

「フン！身内って…ど～せ裏切る癖に…カオスⅡ私をも支配するん

だろ？だつたら今すぐしてみる。コスモス側に倒される前座め。」

ガーランドの言葉に皇帝がキレた。

「…この野郎。よし！お前ら（コスモス軍）待ってる！！ハンデを与えてやる。今からこのバトル馬鹿を消すからじつとしてろ！！！」
「口だけでトラップ攻撃にしか芸の無い奴が！良かろう。かかって来い。」

こうしてガーランド vs 皇帝のバトルが始まった。

一方…

「待つてろって…言われても時間掛かるし…時間圧縮して二人とも亡くなった事にしましょうか？」

アルティミシアが退屈そうに言う。

「お前、時間圧縮の使い方間違っていないか？」

暗闇の雲がアルティミシアに対して抗議する。

「時間は有意義に使わないと損です。それに待たせてる彼らの決意が無駄になりませんか？」

「有意義って…お前にとってあの二人は無駄な時間なのか？酷いのう…」

暗闇の雲がアルティミシアを残念そうに見た。先程からやたらと抗議する同僚に遂にキレる。

「…煩いわね、さっきから。アンタだって全て無に帰したいんでし

よ？じゃあ別に良いじゃない。コレだから中途半端は…」

「何じゃと？中途半端とはどういう事じゃ？言ってみよ？」

「アンタ、女でも無ければ男でも無いんでしょ？だから中途半端って言ってるの！エクスデスみたいに性別くらいハッキリしたらどうなの？この無性物！！」

“無性物”と言われた暗闇の雲がキレる。

「フアフアフア…お前こそ、中途半端に色気付きおって。もっと動きやすくしてはどうだ？そんな格好だからトロいのじゃよ。…あとパンツ履け。」

アルティミシアはパンツを履かない主義らしく、それを目の前の相手に目撃されたのに憤慨する。

「何ですって？…パンツの事は誰にも言っていないのに…貴様、いつ覗いた？嗚呼…同性のティナなら兎も角、寄りによつて…この無性物に見られるとは…」

「黙れ。ノーパン魔女。…決めた。お前から無に帰してやるわ！」

「ならば私は貴様の時を止めてあげるわ！」

今度はアルティミシアvs暗闇の雲のバトルが始まりだした。

一方…

「うわぁ…くだらない事で争ってるよ。あの人達…あれ？ガブラス何処行くの？」

クジャがガーランドやアルティミシア達のバトルを呆れながら見てるとガブラスが何処かに向かって歩き始めたので話し掛ける。

「…もう嫌だ。お家（12の世界）に帰る！カオスの我が儘に付き合うのはウンザリだ！！」

「ふん…あつそ！じゃあね！！達者で。」

手を振って見送るクジャ。そこに…

「お前、止めるよ。何故引き止めない？」

エクステスがクジャの態度に文句を言う。

「だって…本当にくだらないし…本人が嫌がってるなら止めなくて良いじゃん。」

「コスモス軍に対して人数で負けてるから！…全く、自分以外に配慮が無いから我々の事を考えれないんだな。」

「僕はいつだって自分が一番さ。今に始まった事じゃないだろ？」

自信満々なクジャ。その態度に益々苛立ったエクステスが…

「そんなんだから弟に負けるんだよ。もっと視野を広げるよナルシム？」

ピキッ！クジャの額に血管が走る。

「…僕がいつジタンに負けた？アンタだってよくコスモス軍から技の練習台にされてんじゃないか！少なくともアンタよりは強いよ！」

事実、エクステスはコスモス軍によくレベル上げの練習台にされる。コスモス軍からは“先生”と呼ばれてるのは内緒。

「ほほうっ！言ったな…小僧！！貴様から無に帰してやる！！！」

「ちよっ！暗闇の雲とセリフ被ってるよ？もう枯れ際だから浮かばなかったのかな？セリフ…」

「……！」

「あははは！バゝカ、バゝカ！！！」

遂にはクジャvsエクステスのバトルも発展し始めた。

こうして、カオス軍は身内揉めが始まりコスモス軍は取り敢えず面白いので見事にした。

後編へ続く。

< 中編 > (後書き)

魔女の疑惑については作者自身は見えてないのでネタにはしたけど確かめてはないです。

仮に確かめたとしたら俺、変質者だよ…

<後編> (前書き)

カオス軍に対抗しにやって来た女子十二楽坊。しかしカオス軍は十二楽坊に恐れをなしたのか同士討ちをし始めた！果たして軍配は？

くキーワードく

- ・ 女子高生
- ・ ティナが辞めた理由
- ・ ジェクトが悲惨

<後編>

「うっざいですね… ストーカー。いくら金髪の人が気になるからって後追うの止めたらどうです?」

ケフカがセフィロスを茶化す。

「お前だってテイナの後を追ってたから同類だろ?一緒に破壊しましょうって…一人で何も出来んのか!この馬鹿殿!!」

ケフカの格好が馬鹿殿というか8のオダイン博士に似てるのか意味の分からない事を言い出すセフィロス。

「貴方こそ7の時にコピーに行動してもらわないと何も出来なかったでしょうに?元英雄も人の手を使わないと只の人形ですね…」

「…情緒不安定のお前に言われたく無いわ!…くそ、斬る。行くぞ!!!」

いつの間にかケフカvsセフィロスのバトルまで始まり出し、カオスは溜め息を吐いた。

「ああ…我自ら動かねばならぬのかって…そこ!寛ぐな!!」

「へ?」

女子十二楽坊はカオス軍のあまりの同士討ちっぷりに飽きてしまい皆で好き勝手に話を始めていた。

「だって…飽きたんだもん。一向に決着が着なくてつまんない!…ほら?よく言っじゃない女心は秋の空って…」

「それ違つ。つゝかコイツらお前とチビを除けば全員男だから！まあ良い…こうなったら我が軍で一番若くて強いティナちゃんを仕向けてやるっ！！」

堂々と言い放つカオス。コスモスはやや呆れながら…

「ティナちゃんって…お前、そんだけでかい体格で“ちゃん”は無いだろ！」

取り敢えずツツコミ…

「…というかそのティナちゃんってあの娘なんじゃ？」

コスモスがティナを指差す。十二楽坊の中によく見ると楽しそうに皆と混じって話をするティナが居た。どうでも良いが…ついで見るとその中にはゴルベージも居り弟達と一緒に楽しそうに話してた。

「…でさ！もうおばさんばつかで嫌だったの。でね、私の上司がセクハラしてきて…丁度辞めたいって思ってたのよね…！」

ティナが三人のコスモス軍達に愚痴を漏らす。

「えゝ！嘘！！セクハラ？マジ有り得ないんですけど？」

フリオニールがティナに同情する。

「本当！本当！！マジ有り得ない！！！」

ティーダもフリオニール同様の事を言う。

「可哀想なティナ…あ、良かったら私達の軍に来なよ？コスモスは女だから気持ち解ってくれるよ！」

オニオンナイトがティナをコスモス軍に誘う。

「そうだよ！来なよ！！マジ大歓迎！！！」

フリオニールもオニオンナイトの意見に賛成する。

「み〜ん〜な〜…悩み聞いてくれて有難う。私、同世代の子が居なくてずっと心細かった…」

泣き始めるティナ。ずっと我慢し悩みを抱えていたのだろう。ひとしきり涙を流した後、スッキリした顔立ちで、

「決めた！」

ティナは立ち上がりカオスに向かって…

「私、カオス軍を辞めます！今まで御世話になりました。」

ショックを受けるカオス。

「え〜！そんな…何が悪かったの？我の何が…」

辞める理由を聞く“元”上司。ティナは悪気もなく…

「…強いて言うなら体格ですかね？むさ苦しい事この上無くて…」

「ほぼ全否定じゃん！」

「あはは。マジウケるんですけど！」

フリオニールがカオスの反応に笑い始める。

「カオス、あの顔…超ヤバ！」

オニオンナイトがカオスの情けない顔に嘖き出す。傍若無人なその態度にカオスは怒り…

「人が落ち込んでる時に笑うな！貴様ら何でさっきから女子高生口調なんだ？」

「ハア…？意味解ないし！」

ティーダが呆れたようにカオスに言い、他の二人も同調しだす。

「っ…か何怒ってるか解ないし！」

とオニオンナイト。更にフリオニールが…

「マジ消えれば良いのに…カ…何とか。」

「ちゃんと名前を言えよ！カ・オ・スだ！！さっきまで呼んでただら…！！！」

カオスが自分の名を区切りながら三人に言う。

「じゃあ、そのカ・オ・スさんよ…ちょっと話があるんだが…」

ジェクトがカオスの名前を区切りながら呼んだ。

「普通に呼べ！…で何だ、話って？」

「頼む！もうこんなの耐えられねえ！！俺をアンタの軍に入れてく

れ!!!」

「ええええ〜!」

こうして、見事コスモス軍は勝利し…シャントットは満足したのか自分の世界（11）に帰っていた。ティナがコスモス軍にジェクトがカオス軍に入れ替わった事でまた新たな争いが出てきたのは別のお話。

<後編>（後書き）

次回から本編（第二部スタート）に戻ります。

君を振り向かせたい（前書き）

何とか救世主に助けられ無事逃げ延びたクラウド…彼がこれから向かうのは敵であるカオス側の域だった…

〈キーワード〉

- ・ 中の人ネタ
- ・ ウツカリにご用心

君を振り向かせたい

「ふう。何とか撒いた。助けてくれるのは嬉しいが寄りによってジタンが来るとは…アイツの事だ、WOLの戦いの後にデートの誘いがあるに違いない…そう思うと。」

クラウドは想像し身を震わせた。

「もう済んだ事だし…これ以上の想像は無駄だ。…どうするかな？これから…」

辺りを見回してると…

「おや？見かけない小鳥だね？君は誰だい？」

アホ毛の銀髪の青年がクラウドに声を掛けてきた。

「お前は！愚者…」

「違う！愚者じゃない“クジヤ様”だ。濁点の位置がおかしいよ！」

アホ毛…もといクジヤはクラウドの名前違いに呆れつつ腹を立てる。

「全く、困った小鳥だね…。…ん？何で君、僕の名前を知ってるんだい？…あれ、君…何処かで会わなかった？」

じ…っとクラウドを見るクジヤ。

「ええ？今、初めて会ったと思うかな…」

見ていたクジャが突然思い出したかのように…

「あ、君は暗闇の雲だね？」

「違う！クラウドだ。何であの痴女と一緒になんだよ！！」

今度はクラウドがクジャに怒り出した。

「うん？クラウドってあの武器になりそうなヘアスタイルの人だっけ？」

「ならねえよ！いくら髪固めても刺せねえから！！」

クジャのペースにどんどんハマっていくクラウド。クジャは正体を明かしたクラウドに今更な疑問を投げた。

「で？…何で、そんな格好してんの？」

「…俺も解んない。何でこんな格好してんだろっな？」

軽く現実逃避に陥る。

「…しかもこの格好のせいでジタンに目付けられるし…」

「…アンタ、ジタンを誑かしたって？」

“ジタン”に反応したクジャが先程の穏やさとは違い殺気の帯びた声でクラウドに言う。

「ひ、人聞き悪い事を言うな！あっちが勝手に気を持ったただけだろ？」

「勝手に？僕の弟を誘惑しといて何たる言い訳を…」

益々殺氣立つクジャ。

「誘惑してねえよ！気色悪い事を…そんなに気になるなら…」

此処で言っではいけない事をクラウドは言ってしまう。

「気になるなら、アンタだってやれば良いだろ！女装を…！」

ハアハア…と息を吐くクラウド。すると、

「…それでジタンは僕に振り向くかな？」

クジャに言われふと我に帰る。

（はっ！しまった。ついカツとなったから変な事を言ってしまった
！！）

だらだらと嫌な汗が流れてくる。沈黙に耐えかねたのかクジャがまた問い掛けてくる。

「さっきから何で黙ってるんだよ。ねえ振り向くかな？」

「…振り向くんじゃないんですか…」

言ってしまったものは仕方無いと半ば投げやりに返すクラウド。

「本当に？そうだよな！ジタンは君みたいな奴にも惚れたんだ…きつと大丈夫だよな？よし！！僕も女になるぞ。」

「あはは…。頑張って下さい…。」

乾いた笑いが出る。

「有難う！君と話せて良かったよ。じゃあ僕は忙しいから…これで
！」

クジャがクラウドの元から去っていた。

「…。何て言うか…ジタン。すまん！」

クラウドは本気でこの場にいないジタンに謝罪した。

君を振り向かせたい（後書き）

この話で暫くクラウドの出番はありません。

代わりに秩序組がいっぱい出てきます。第二部はジタンが主役です。

幕開け（前書き）

クジャに変な事を教えてしまい、後悔をするクラウド。一方その頃、ジタンもWOLから何とか撒いた所だった。

～キーワード～

- ・Mr・フリーダム登場
- ・中の人ネタ（但し本人ネタではない）

幕開け

「ああ…しつこかった。何とか撒いたか…ありやあゝ当分奴の前に表れない方が良いな。」

ジタンがそんな事を思つてると…

「おゝい！ジタン。」

「よう！バツツ。」

バツツがジタンの所に駆け寄ってきた。

「どうしたんだ？こんな所で？」

「聞いてくれよ！バツツ。大変、大変なんだよ！！女の子がWOLに襲われてたんだよ！！！」

クラウド
女性が襲われてる所を手振りしながら伝えるジタン。

「何だつて？その娘は今どこに居るんだ？」

辺りをキョロキョロ見回しその女性を探す。

「さあ、俺が助けたんだけど…怖かったんだろ？な、逃げちゃって…」

しゅんとなるジタンにバツツは…

「ジタン…いくら助けたからつてすぐに“お持ち帰り”はマズイだろ？そりゃあ逃げるよ。」

「してないし！何で俺が襲って逃げたみたいになってんだよ！！アホか！！！」

「違うの？」

「違うわ！WOLに襲われてた所を俺が助けたんだよ。あれループしてる？兎に角：お陰で俺もWOLに目付けられて…」

ハアハアと息をまくし立てながら喋るジタン。

「WOLは何でその娘の事を襲ってたんだろ？」

「さあ？そっぴやカオスの手先とか言ってたよゝな…取り敢えずWOLより先にあの娘を探さないと…今度こそ…」

言葉には出さなかったが悪い方向に行くのは確かだ…とバツツも判断して…

「解った！俺も探してみるよ。他の仲間達にも声掛けといた方が良いかな？」

「そうだな！早くしないと青鬼が来るし…」

焦りながら言うジタンに“青鬼”について聞いてみた。

「？…青鬼って何だ？」

「…実はな。WOLの事なんだよ。」

小さなヒソヒソ話でバツツの耳に語りかけたが、バツツは大声で笑う。

「あはは！WOLが青鬼っておかしいな！！」

「しっ！声大きいよ。見つかったらどうす…」

ガサガサ。

後ろの方から物音がし振り返ると…

「みっつけた〜！ククク…。」

「ギャアアア！」

WOLが立っていたので二人は悲鳴を同時に上げた。

こうして、鬼ごっこの幕が開けた。

鬼ごっこ(前書き)

遂にWOLに見つかってしまったジタン。バツツの大きな声のせいでまでも鬼ごっこスタート

コスモス：「ていうか私の出番は何処行った！」

～キーワード～

- ・ブレまくりのWOL
- ・コスモスの出番は少し先

鬼ごっこ

「今度こそ、息の根を止めてやろう…ククク…あははは。」

笑いながら言うWOLに怯えるジタン。

「怖い。怖いから!」

「WOL! 落ち着けて!!」

バツツがただ事では無いと感じ二人の間に割って入る。

「あ! 馬鹿…」

ジタンは自我を失ってるWOLとの間に入るバツツを制止しようとしたが、遅かった。

「ほほう…バツツ、お前もこの裏切り者の仲間か? ならば一緒に血祭りにしてやろう。うふふふ…」

(激怖っ!)

WOLに対して二人は同じ意見を心の中で言った。

「あの野郎、完全に逝っちゃってんな…」

「…ああ。普段笑わない分キレた時に反動が来るのかもしれないね…」

二人はヒソヒソと話し…

「こうなったら…」

「そうだね!」

WOLに背を向け、掛け声を二人合わせて…

「せーの！」

ジタンとバッツは一目瞭然にその場から去っていく。

「あははは。何処へ逃げても無駄だ！例え水や火が来ようと地獄の果てまで追い詰めてやる！！あゝっはははは。」

二人の行動に気付いたWOLが物凄い早さで追いかけてくる。WOLのセリフにバッツは…

「何か某皇帝みたいな台詞を吐き出したよ…」

走りながらジタンと話す。

「どんどん笑いが増えて来てるな…なのに目が笑ってないのは何故だろ？」

「本当に…取り敢えず、二手に分かれて仲間達にも知らせよう」

「ああ。そうだな…」

二人は心を一つにし…

（鬼が来たと…）

ジタンとバッツはそれぞれ別の方向に逃げていく。

「二手に分かれるとは考えたな…だが安心するが良い…片方を潰したとしても一方もまた潰すからな…あっはははは！」

どうやらジタンから先に潰すらしく後を追ってきた。

「やっぱ、俺の方に来るんだな！うわ〜ん！！怖えよ〜！！！！」

半ば泣きながら走るジタン。

「ジタン！逃げてろ…すぐ仲間連れて来るから！！」

「マジで！早く頼む！！青鬼怖いよ〜！！！！」

青鬼に反応したWOLは笑いながら肯定する。

「青鬼とは私の事か？ククク…今の私にピッタリだな。…イヒヒヒヒ。」

「認めちゃったよ…ついに。そして笑い方がどんどん怖くなってきてるんだけど！」

笑いについてピクつと反応したWOL。

「笑いが怖い？普段から笑ってるであろう。もうっ、ジタンったら…ヒヒヒヒヒ。」

「キレすぎて変なキャラになってる！あんなのに殺されてたまるか！！絶対に逃げ切ってやる！！！！」

果たして逃げ切れるだろうか？

最初の脱落者（前書き）

キレすぎてキャラすら掴めなくなったWOLさん…彼は元のブレない光の戦士に戻るのだろうか？

くキーワードく

- ・脱落するのは？
- ・狩人WOL

最初の脱落者

仲間の元に辿り着いたバッツは今までの経緯を簡単に話した。

「ジタンがWOLに襲われてる?」

「何で? 僕達は仲間なのに?」

フリオニールとオニオンナイトは信じられないという顔をしそれぞれ意見を述べた。

「ジタンが女の子を助けたのが気に食わなかったらしいよ…いつもの事なのにね?」

バッツはジタンの述べた経緯を覚えていないのか端折って仲間達に話したらしい。

「WOLはもしかしてその娘の事が気になったんじゃないんすか?」

ティーダが軽い冗談を口にする。

「どうかな? それより早くしないと…ジタンがジタンが…青鬼に!」

バッツが答えると同時にジタンの身を案じていた。その時…

バキ!

何かが折れる音がし皆が振り向くとWOLがいた。

「うふふふ…もう一匹の方み…つ…けた。ジタンめ…流石は盗賊。」

足の速い奴め」

ジタンにまんまと逃げられ野生の勘で此処まで辿り着いたらしい。笑いながらも目は狩人の如く光っていた。

「……。あれは本当にWOLだよな？何か色々変になってないか？」

引きながら言うフリオニール。

「……。何か凄まじいオーラを感じるんだけど…」

ただ者では無いオーラを感じ取るオニオンナイト。

「……。あれに追っかけられれば誰でも逃げるっすよ！」

ティードは大声で言うところ…

「ゴチャゴチャうるせえな！ケケケケ…。皆まとめて破壊だ！！！」

WOLが剣を振り上げる。バツがまたセリフについて…

「今度は某ピエロのセリフが出てきた。」

「言ってる場合か！ほら逃げるぞ！！！」

フリオニール達は走ってWOLから離れようとする。

「あ！待ってよ！！！」

オニオンナイトが一步遅れて走る。

「ネギ坊。早くするっす！遅れたら殺されるっすよ！！」
「そんな事言われたって…うわぁ！」

オニオンナイトが石に躓いてしまう。その隙を突きWOLがオニオンナイトに襲いかかってくる。

「ククク…まずは貴様からだ！」

「ネギ坊！危ない！！」

オニオンナイトをティーダが庇いWOLの攻撃が当たってしまった。

「うわぁぁぁ！」

「ティーダ！」

フリオニールがティーダに声掛ける。

「あっはははは！まずは一人 次は誰かな？」

「俺は…も…う…駄目…だ。…今の内…は…や…にげ…」

瀕死の状態でWOLを止めるティーダ。

「くっ！離せ！！私の邪魔をするな！！！！」

「ティーダ！」

オニオンナイトがティーダに駆け寄ろうとするのをフリオニールが引き止める。

「駄目だ！もう手遅れだ。すまない…ティーダ。」

「ネギ坊、ほら行くぞ！」

「でも！」

バツは未だに駆け寄ろうとするオニオンナイトに説得する。

「でも…じゃねえよ。アイツが命懸けて守ったんだ。お前は生き延びないと…」

「…うん。解った！ゴメンね、ティーダ。」

ようやく諦めたオニオンナイトはティーダに謝り仲間と一緒にその場から去っていた。

「…あ…あ…生き…延びろ…よ。」

「ええい！離せ！！この死に損ないが！！！！」

こうして、脱落者が1名出た。

瀕死（前書き）

脱落者が出てきた鬼ごっこ。ティードは無事なのだろうか？

〈キーワード〉

・コスモスにも制止不可（但しわざと止めなかった節あり）

瀕死

「やっと力尽きたか。さてと他の奴らも早く狩らなくちゃ うふふふ…。」

WOLは狩人の如く目を光らせながら去っていた。

「……。イテテテ！あゝ、何とか行ってくれたな。…怖かった。」

ティーダは見た目より傷は浅いもののHPが赤くなってる為、回復を要する状態であった。

「早く、皆と合流したいっすけど…WOL怖いし…回復しないと今度こそ死ぬし…」

「はあゝ、やっと出番来た！WOLの野郎…私の出番奪いやがって…。」

突然、コスモスがティーダの前に現れた。

「うお！コスモス…アンタいったい何処から湧いてきたんっすか？」

「湧いたって言うな！…それよりティーダ、傷は大丈夫？HP少ないぞうだけど？」

「大丈夫な訳ないっす！WOL本当に手加減知らなくて…」

痛そうにコスモスに言うティーダ。

「あの状態のWOLに手加減っていう言葉はどうかと思う…」

「そーいやコスモス、その場に居なかったのに何であの状態のWOLを知ってんすか？」

素朴な疑問をコスモスに投げかける。

「居たよ。アレになる前から。」

「……。どうして止めないんすか！こっちは酷い目に遭ったんすよー！」

余程怖かったのかコスモスに怒るティータ。

「あのね……流石にヤバイなと思って私だって止めようとしたんだけど……」

ー回想ー

「ちょっとWOL！もう止めなさいよ！！」

「コスモス……どうして止める？さてはお前もあの娘に毒されたんならば斬る！！」

「キャアアアア！」

コスモスは瞬間移動を使ってWOLから逃げた。

「……ってなった訳。アレを止めるの私には無理だわ。」

肩を竦めて言うコスモス。

「確かに。コスモスはノンプレイヤーキャラっすもんね……イテテテ。そうだ！コスモス、用事があつて俺の所に来たっすよね？ポーション持ってないっすか？」

傷が癒えてないティータは未だにHPが赤い。

「私は持っていないけど…“この人”なら持つてるわよ?」

コスモスの後ろに表れたのは…

回復方法（前書き）

ティードの前に表れたコスモス…彼女が連れてきた人物とは？

〈キーワード〉

- ・軽くネタバレ（10）
- ・漢らしい回復手段（絶対に真似しないで下さい）

回復方法

「これはこれは。ジエクト様の所のお坊ちゃんではありませんか？」
瀕死の息子にからかいながら歩み寄る。

「親父？何で此处に？コスモス！どついう事だ？」

ジエクトの登場に怒るティーダ。親子なのにあまり仲良くないのだ。

「逃げてる時に“偶然”出会ったのよ。」

「“拉致”つただろ？おめえ、神様の癖にやる事滅茶苦茶だな？」

ジエクトがコスモスを見て呆れながら言う。

「お黙り！的がいっぱい居れば、その分生存率が増えるのよ。こつちだって生き延びるのに必死なんだからね！！」

「的って…おめえ、そんな事で俺を連れてきたのか？」

「うっさいわね！この裏切り者！！」

コスモスはジエクトがカオス軍に寝返った事を言う。

「裏切り者って…あんな事されりや誰だって逃げるだろうが！」

ジエクトも何となくだがトラウマに近かったせいか覚えていた。

「だいたい、俺みたいな奴の女装なんてPAPUWAのウマ子にしかならねえだろ？誰が期待すんだよ！！」

「ウマ子のファンなら気に入るわよ。」

「微々たる数しか居ねえよ！そもそもアレを女として見るかも怪しいし…中の奴（声優）は男じゃねーか！！」

コスモスに反発するジェクト。

「見た目じゃなく心の目で見るのよ…きつと！」

「心の目って…結局、現実に目背けてるだけじゃ…」

「あゝ、そろそろ回復してくれないっすか？HPキツインすけど？」

なかなか話が終わりそうに無いので間に入るティード。

「ちっ！…ちよつと待ってな！！」

ジェクトが口にポーションを含んで…

「？」

何をするのだろうと見てたら、いきなりティードに向かって…

「ぶはあゝ！！」

口に含んだポーションを噴いた。びしょびしょになったティードは…

「…てめえ、何で口に含んだ？そのまま回復対象に掛けるんだよ！使い方は前に俺から教わったよな？」

「あん？そうだっけ？良いじゃねーか…効果は同じなんだし…」

「寧ろ、アンタの口から噴いた時点でマイナスだっつーの！馬鹿だろ？お前…」

馬鹿と言われてカチンときたジェクト。

「親に向かって何を言うか！もう一回教育してやろうか？」

「殆ど家に居なかった癖に！教育というか旅だってアーロンの方がよっぽど世話になったつすよ！！」

「俺だってシンに取り憑かれてたから仕方無えだろ！シンのままお前に会いに行ったら泣くだろ？」

「そゝ言ってんじゃない！！もうアンタとはケリ付けねえと駄目だな。」

「泣き虫が何言ってるんだか…解った。ケリ付けようか？」

「望む所だゝ！」

こうしてティーダのHPは回復したが親子の絆は大きな溝が出来てしまった…

「まさか…あのスキンシップ（回復方法）を実行するとは…冗談のつもりだったのに…」

コスモスは笑いながら親子喧嘩を見ていた。

回復方法（後書き）

親父がもしするならこの方法だろうと思います。書きました。

大いに闘争を楽しもうではないか！（前書き）

回復をし復活したティードだったがジェクト（というかコスモス）のスキンシップのせいで絆に亀裂が生じた為に再戦不可能に…結局脱落者2名（親父含む）。その頃カオス側では新たな動きが…

｝キーワード｝

- ・行かなきゃ良かった…
- ・偵察 見捨てる

大いに闘争を楽しもうではないか！

「今、コスモス側は内部紛争が起きてるらしい。叩くなら今だろう。」

皇帝がガーランドに話す。

「そうだな。最近戦いが無くて腕が鈍りそうな所であつた。丁度良い！我らが直々にあちらに行こうではないか？」

ガーランドは自ら敵陣に乗り込む事を提案する。

「其れは名案だな。虫けら共の恐れをなした面を想像するだけで行くぞ！ガーランド！」

二人はカオス側を後にし、敵陣であるコスモス側へと出掛けていった。

「しかし、トラップメイカーの貴様がわざわざ現地に赴くと言いつとは…何を企んでおる？」

ガーランドは皇帝に疑問を投げる。

「別に…企んでなどいないさ。ただ私は虫けら共の屈服する姿が見たいだけ…それだけだ。」

「ふん！まあ良い。聞いた所で貴様がはぐらかすのは解っておつた事…ただ僕の戦いの邪魔だけはするなよ？小僧。」

「言つてろ。老いばれが。」

二人が憎まれ口を言い合ってる時に…

「ん？あそこに見える青い輩は…我が宿敵ではないか？」

ガーランドが向こうに見える人物に気付き、近付こうとする。

「まさか一人で居るとは…ククク。二対一、好都合だ。」

皇帝の言葉に怒るガーランド。

「貴様！我が宿敵は私が相手だ！！言った筈だ…手出しはするなと。」

怒っているガーランドを大げさに両手を広げながら…

「おお…怖い怖い。“戦闘狂のガーランド様”がお怒りだ。では私は貴様らの戦いを見物するでしょうか…」

皇帝は近くの物陰に隠れる。ガーランドはWOLの元へ行き、高々と宣言し…

「我が宿敵よ。貴様に会えて嬉しいぞ！大いに戦おうではないか？」

「お前は、ガーランド！」

ガーランドに気付いたWOLは驚く。

「ふふふ…。貴様らが来ないお陰で僕の腕が鈍りそうだな…。だから僕の方から来てやったわい！」

「そうか…それは良かった。」

まさか宿敵からそんなセリフが出てくるとは思わず嬉しいがーランド。

「がははは…貴様からそんな台詞が出るとは嬉しいぞ！我が…」
「あつははは！2匹目ゲット」

WOLの様子が豹変したのに驚き、絶句する。

「……。あれ？貴様そんなに笑顔だったっけ？」
「何を言っておる。私はいつも笑顔であろう？全くどいつもこいつも顔ばかり言いやがって…」

プリプリ怒るWOL。

「あのく、WOLさん？」
「ああん？てめえの面を叩き割ってやんよ！ヒヤヒヤヒヤ！…」

WOLがガーランドの面を両手で掴み物凄い力で外そうとする。

「ギヤアアア！おい、皇帝！！見てないで助けるよ！！！」
「お前さっき邪魔すんなって言っただろ！」

火の粉を振られた皇帝は…

「…宿敵の戦いに水を差したら悪いな。では！私はコレで！！」
「てめえ、見捨てやがったな！後で覚えてろよ！！！」

去っていく皇帝の背中を見送り、取り残されたWOLとガーランド。

「良かったな？コレで邪魔者は居なくなっただよ？ゆっくり狩りが出

来るじゃないか…ウフフ。」

「降参するから！命だけは…」

WOLが剣を振り上げ…

「問答無用」

「ギヤアアア！」

ガーランドに下ろされた。的が増え、犠牲者も増えた。

脱落者3名。

大いに闘争を楽しもうではないか！（後書き）

戦闘狂のガーランドは作者が付けた通り名です。実際は呼ばれませ
ん。

剣のダンス（前書き）

自ら戦地に赴き、宿敵に心躍らせ挑んだガーランドさん。見事返り討ちに逢ったとき

くキーワードく

- ・月のワルツ
- ・ひぐらし

剣のダンス

ガーランドを倒したWOLは上機嫌のあまり鼻歌を歌いながら剣の血を拭き取っていた。

「フンフンフン コレで2匹！嬉しいな…ウフ。」
（気色悪っ！）

ガーランドは瀕死でありながらも辛うじて意識を保っていた。剣を拭き終わったのか踊り始めるWOL。

「まだ居るかな？かな？」
（うわぁ…ひぐらしのレナが此処にいる…）

狩りのダンス（？）をしていたWOLがピタッと動きを止めた。

「足りない。…足りないな…もっと…もっと！…狩らないとね？
母さんに言われたもんね…」

（某英雄みたいな事を言い出したよこの人…）

「あ、そーいやコイツ以外にもう一匹…黄色いの居たっけ？ソイツを狩りに行こうっと」

WOLはその場を去っていた。

「瀕死だけど…助かった。」

ガーランドは瀕死ながら呟いた。

「その頃、バツ達は…」

「此処まで来れば大丈夫だろう。ジタンは何処行ったかな？」

辺りを見回しながら安全確認をするバッツ。

「怖かった！何あれ？本当にWOLなの？」

オニオンナイトが先程の体験を思い出しながらバッツに尋ねる。

「多分…俺も自信無い。」

バッツにしては珍しく弱気な発言。

「あのWOLが笑うとはな…怖かったけど…」

フリオニールもオニオンナイト同様、信じられないという感じで述べる。

「これからどうしよつか？」

「そ…だな…」

オニオンナイトがバッツに聞いていると…

「お…い！」

「ああ！ジタン…無事だったか…！」

ジタンがバッツ達に近付いてきた。よく見るとセシルやスコールも一緒だ。

「WOLが笑ってるって本当？」

「見たかったな…WOLの笑顔！レア…」

セシルとスコールが珍しいモノを見たかったと言わんばかりに皆に尋ねる。

「お前ら…そんなに見たいなら見に行つて来いよ！」

「そ…だぞ！こっちは死ぬ思いしたんだからな…！！」

「ついでにやられてきなよ。」

順にバツツ、ジタン、オニオンナイトが危険な目に遭ったのを知らない二人に腹を立てながら言い放った。

「嘘！嘘だよ…それにティーダがやられたって本当かい？」

セシルが謝りながらもWOLに倒されたティーダを心配する。

「ああ。俺達の目の前で…」

「俺達の為に瀕死なのにWOLを止めてくれたんだ…」

フリオニールとバツツが答える。

「そうか…大変だったな…」

ただ事では無いと感じたのかスコールもセシル同様に心配する。

「…あれ？何でスコール達はティーダがやられた事を知ってんの？」

オニオンナイトが居ないはずの二人が何故知ってるのか聞いてみる。

「コスモスから聞いたんだ…でもコスモスが助けに行ったから今は

無事らしい…」

「安全な場所で匿ってるんだって…ティナが看病してくれてるって
言ってたよ…」

スコールとセシルがコスモスに会って話した事を皆に伝える。

「其れは良かった！ティーダも生き残ってるんだな…」

バッツが胸をなで下ろしながら言う。

「まあレディにあの青…WOLは見せられねえよな？」

笑顔が怖いWOLを見てなくて良かったとジタンも言う。

「そうだな。確かに笑顔だったけど…目が笑ってなかった…」

「うん…目がね…」

フリオニールとオニオンナイトもジタンに同意する。

「兎に角逃げ回ってばかりでも何れはこっちが力尽きる…何か作戦
を立てようぜ！」

ジタンが皆に作戦会議を開こうと提案する。

「おお！そ〜だな！！」

こうして作戦会議は始まった。

剣のダンス（後書き）

ー本当はー

コスモス：「バカ親子はほつといて良いとしても…ティナがやられ
たらトレードした意味無いもんね。よし、ティナだけ匿って私は
アイツらの鬼ごっこをこつそり観戦しよう」

番外編：スコールの受難（前書き）

今更なネタ。

｝キーワード｝

- ・職権乱用
- ・嫁

番外編：スコールの受難

「まあ！何よその態度！！アンタだって心の中で自分と会話してんじゃないの！！！」

スコールのアンケートの回答を見て腹を立てるコスモス。

「！？…何で、知ってる？」

思った事を声にあまり出さないのですコールは驚く。

（まさか、口に出てたのか？）

「うふふ…私は“神”様だもの。これ位チョロいチョロい」

「単なる職権乱用じゃね〜か！何が神だ。ふざけるな！！」

心の会話を盗み聞きされ怒るスコール。

「人聞き悪いわね。この老け顔！私の力で8より若返らせてあげたのに何て態度なの？」

「別に頼んでないし…そろそろ任務に戻って良いか？」

コスモスの意見を無視して何処か行こうとするスコールに…

「まだ話は終わってないわよ！リノアだっけ？あのヒロイン…あんな誰からも嫌われるような娘をよく愛せるわね？人選悪いんじゃない？…っていうかりノアに尻敷かれてる癖に！けっ！！」

理不尽な態度にキレるコスモス。すると…

「すいません、俺が悪かったです。帰ったら叱られるんで、それ以上うちの嫁の文句言つの止めて下さい。」

スコールは泣きながらコスモスに土下座しエンディングで8の世界に帰った後にリノアにボコられたのは言うまでも無い。

番外編：スコールの受難（後書き）

いつかアンケートの方も小説にしてまとめたいと思います。

作戦会議く巻く(前書き)

作戦会議開始。

くキーワードく

・息ぴったり

・ポカ(°。°)ーン

作戦会議<壱>

オニオンナイトとジタンが進行役になり会議を開始する。

「では、これより“打倒WOL”の作戦会議を開始致します。」

オニオンナイトが皆に声を掛ける。

「全員起立、礼、着席。」

「皆さん、意見がある人は手を挙げて下さい。」

ジタンがオニオンナイトに倣って声を掛ける。

「…はい。」

「はい！」

「はい。」

「はい。」

順にスコール、バツツ、フリオニール、セシルが手を上げる。

「では一番早かったスコールさん、どうぞ」

ジタンがスコールを当てるがスコールは困ったように…

「…え？俺は良い。バツツ、どうぞ。」

「俺も良いよ。セシルどうぞ」

「困ったな。僕最後だったのに…フリオどうぞ」

「じゃあ…俺が。」

と言って…

「どうぞどうぞ！」

フリオニール以外の3人が譲る。

「……。」

ジタンは黙って皆を見ていた。

「真面目にやれ！僕ら命掛けなんだよ？ダチヨウ倶楽部はまた今度で良いから！！」

オニオンナイトが進行役らしく皆を叱る。

「ちえ！つまんねえの…ちょっと緊張感を無くそうと思ったのに、真面目だな？」

バッツが口を尖らせながら言う。

「あまり、肩に力掛けすぎると却って悪いと思ってな？悪気はなかった…スマン。」

スコールは少し申し訳なさそうにオニオンナイトに謝る。

「あ、こっちこそゴメン…もっと察するべきだったね…」

オニオンナイトは気を使って貰ったのに気付くべきだったと恥じるが…

「良いんだよ。」

「グリーンだよ！」

セシルが言うつと3人が合わせて叫ぶ。

「……。」

黙り放しのジタン。

「……和んでる所、悪いんだけど……そろそろ止めようよ……ジタンがさつきから黙ってて怖いんだけど……」

オニオンナイトがいつもは明るいジタンの黙りっぷりに異常を感じている。

「……そうだな。そろそろ止めないと本気で怒りそうだな……」

「ジタン。悪い！そんな怒んなって……な？……ジタン？」

フリオニールがオニオンナイト同様に異変に気付き、バツツも悪い
と思い相方に声を掛けるが……

「……ぷっ。」

噴き出す声が聞こえた。

「？」

皆がぼか〜んとしてると……

「あっはははは。ウケる！何そのコンビネーション！……何処で習った？良いんだよ。グリーンだよ！……ははは。」

ジタンの笑いが収まるまで作戦会議は一時中断に…

作戦会議く壱く（後書き）

コスモス曰わく…

「ジタンのツボが解らん…何処が面白いのやら…」

作戦会議く式く（前書き）

このままでは力尽きてしまいWOLの暴走を止められないと思った一行は作戦会議を立てる…しかしこの作戦会議。ある男によって惨劇を更に悪化させる事になるとは誰も知らない…

くキーワードく

- ・勘違いスタート
- ・WOLが青鬼化した理由

作戦会議<弐>

「では、今度こそ改めまして。会議を…」

「うひゃひゃ。」

立て直して会議を始めるオニオンナイトに対して、ジタンが未だに笑いが収まっていけないように…

「お前…退場。今すぐ消えろ！」

オニオンナイトが怒ると…

「ひ…ゴメンゴメン。おほん！ネギ君、続きを。」

「…ったく。では作戦会議を行います。意見のある人は挙手して下さい。」

今度こそ気を取り直し、意見を聞く。

「…はい。」

「ではスコールさん、どうぞ。」

手を上げたスコールを当てる。

「実は、さっき見たんだが…どうやらガーランドと皇帝がこっちに來てるらしい。」

「何だって！其れは本当か？」

皇帝と因縁のあるフリオニールが声を荒げる。

「うん。あの目立つ黄色いのと愛嬌のある面を被った鎧のオッサン二人は見間違えないよ。」

「オッサンって…まあ確かにそうだが…セシル、君の口からそんな言葉が出るとは思わなかったよ。」

セシルの意見に若干引くフリオニール。

「で？オッサン二人は何しに此处に来たんだ？」

「もしかして、二人つきりだしデートとか？」

ジタンが疑問を口にするバツツが冗談を言う。

「流石に其れは無いだろう？」

男同士でそれは有り得ないと否定するジタンに、セシルが…

「いや…有り得るよ。だってその後、WOLが来て鎧のオッサン嬉しそうだったし…」

「…まさか！浮気か？」

煽るフリオニール。

「其れっぽかったよ。だって、遠目で見てたけど…皇帝が泣きながら去っていった…その後WOLが怒ってガーランドを斬ってたよ。」

セシルが目撃証言を皆に話す。

「アイツら…いつの間に三角関係に…ていうか何で此处をデートスポットに選んだら？」

「さあ、それは僕にも解りかねるな…ただ僕の憶測だけど…カオス

軍の人達に見られなくなかったんじゃない？だってコスモス側と付き合ってるんだよ？見られたく無いよね？」

バツが何故こっちに来てデートするのかを尋ねると、セシルが憶測で答える。

「あゝ、なるー！」

盛り上がる話にスコールが…

「お前ら…そろそろ、その話止めてくれないか？」

「へ？どして？良いじゃん！」

ジタンが首を傾げた。

「あのな…ここにお子様が居るんだぞ？流石に…三角関係は…」
(そこが問題じゃないと思うけど…)

スコールの注意に、隠れながら皆の様子を伺ってるコスモスが心の中で突っ込む。だがオニオンナイトは…

「ねえ、セシル。それからどうなったの？ガーランドとWOL？」

「あれ？少女漫画でも読んでんの？ネギさん…」

スコールの意見を見無視しセシルがオニオンナイトの問いに答える。

「うゝん、その後ねWOLが…皇帝の逃げた方向を追ってたよ。」

「それはヤバくないか？WOLの奴…そうか！それで怒ってたのか！！」

フリオニールがWOLが嫉妬で怒っていると解析する。

「で、提案なんだけど…三角関係の泥沼の果てを今から見に行かない？」

「それ…良いな。賛成！皆も行くよな？」

「ああ、勿論！」

セシルの提案にジタンが答え、全員一致で賛成する。こうして勘違い三角関係はスタートした。

作戦会議<弐>（後書き）

ちなみにB.L.展開ではありません。あくまで勘違いなので…念の為に！

ぱ＼(・A・)／＼(前書き)

三角関係を見に行く一行：移動の途中でバツツとジタンはある事に
気付く。

＼キーワード＼

- ・漫才っぽい
- ・ますだおかだ
- ・のネタは2話後に続く

ぱゝ(・A・)／＼

「なあ、ジタン。俺、思ったんだけど…」

「何だよ？いきなり…」

バッツがジタンに話す。

「WOLの事を“青鬼”って呼んでたじゃん？あれ、ガーランドと会う時のあだ名じゃないかな？ほら8でアーヴァインがセルフィを“セフィ”って呼んでるみたいな感じで。」

人差し指を上に向けながら話す。

「ああ！それで青鬼って言われて怒ってたのか！！バッツ、今日冴えてるな。」

「だろ？俺も言ってるて吃驚した。」

珍しく冴えてる相方に誉めるジタン。

「じゃあ、WOLはガーランドの事を何て呼んでんだろうな？」

呼び名についてバッツに意見を求める。

「鎧のオッサン？」

「あだ名じゃないな…っつかそれ呼んだのセルルだよ。」

返答をすぐにされ、また考え込む。

「戦闘狂のガーランド？」

「それは通り名だろ、あだ名じゃない…」

「Mr・フリーダム？」

「お前の事だろ！」

更に考えてみたが…

「…何て呼んでたんだろうね？」

「俺が質問したのに！…ガーランドって長えから“ガー”か“ランド”のどっちかじゃねえの？」

ジタンが呼び名に区切りを付けてみた。

「“ガー”だとペットみたいだし…“ランド”だと遊園地みたいだね？」

バツはどっちに区切っても変だと言った。

「そっだな…どっちだろうな？」

どちらかだろうと思っていたが…

「案外、“ガン”とかだったりして？」

「効果音かよ！“ガラガラ”もありってか？」

「閉店ガラガラ。」

最早、呼び名ではなくなり…

「ますだおかだの岡田みたいだな…じゃあもう“岡田”で良いや。」
「そっだね。面倒臭いし…」

こうしてガーランドあだ名は決定した。

ぱ／(・A)／／(後書き)

岡田の“ぱあゝ”のポーズを顔文字にしてみましたが…上手く表現出来ません(爾 爾)

勘違いという名の三角関係（前書き）

バツとジタンが話をし終えたと同時に現場に到着。

くキーワードく

・WOL役：セシル

・皇帝役：フリオニール

今回、彼らは遠目で見守ってる為に会話が聞こえませんが、彼らの妄想をお楽しみ下さい。

勘違いという名の三角関係

「遂に追い詰めたぞ…皇帝。」

「くっ！これまでか…」

WOLが皇帝に剣を向けながら話す。

「よくも私のガーランドを奪ったな！この蛇男！！」

WOLが怒りながら皇帝に訴える。

「何だと？貴様が奪ったんじゃないか！此処ならカオス軍共にバレないから…っと言ってガーランドが連れてきたんだ。そしたら貴様が表れ、ガーランドは嬉しそうにお前の元に行ったではないか！！」

皇帝も負けじとWOLに怒鳴る。

「それは私が真の思い人だからだろ？人のせいにするな…だいたい私の方が先だぞ！」

「何を！こっちは同僚だから私の方が先だ！！」

「貴様、シリーズが違うのに…もう良い。此処で貴様を殺せば浮気相手は居なくなる…」

WOLが皇帝に近付き剣を振り下ろそうとする。

「いったい何を言って…はっ！その返り血は？もしかして…」

「ああ。そうだ。浮気をする男には制裁を…ガーランドはもうこの世に居ない…そして私はお前も制裁しよう…覚悟するが良い！」

間一髪の所で避ける。

「うばあゝ!」

その後のWOLの攻撃も得意の罫で何とか回避し…皇帝は逃走するが、逃げる途中に彼はコスモス軍に出会い拉致されてしまう…果たして皇帝の運命は？

勘違いという名の三角関係（後書き）

次回、皇帝とWOLの会話が明らかに！

大事な事は2回言え(前書き)

皇帝…事情聴衆の為にコスモス軍により逮捕された。

〈キーワード〉

- ・ますだおかだ(前々回の続き)
- ・鋼
- ・すり替え(られ)たのさ

大事な事は2回言え

手足を縛られ不機嫌な顔で皇帝が言った。

「虫けら共がこの私を捕まえるとはどういつ了見た？」

「了見も何も…お前敵じゃん…それより…」

フリオニールが因縁の相手に取り敢えず突っ込み、オニオンナイトが皆が気になる事を代表して質問する。

「ガーランドとデートしてたって本当？」

「…は？」

「俺が見たんだ。ガーランド…いや、“岡田”とイチャイチャ歩くお前らを…」

スコールが静かに意見を述べた。

「イチャイチャしてないわい！そもそも岡田って誰だよ？」

「ウルサイね…“増田”は…相方をWOLに取られたからって…」

オニオンナイトが手を広げながら大袈裟に言う。

「誰が増田だ！“皇帝様”と呼べー！」

「増田」“マスタング”…否、無能大佐。」

ジタンが納得したように呟く。

「マスタングって誰だ？階級、大佐じゃないし！つか無能とはど
ういう事だ？」

「言葉の通り。“無能”とは使えない人の事。即ち、使えない人の事を“無能”って言うんだ。」

セシルが良い笑顔で解釈した。

「私は無能じゃない！…ていうか何故2度言った？」

「大事な事だからだよ…そんな事も解らないの？頭大丈夫？“無能皇帝様”」

オニオンナイトが自分の頭を人差し指で突つつきながら言う。

「だ〜から、無能って言うな！…さっきから勘違いしてるようだが…ガーランドとデートって何だ？」

「え？違うの？」

「俺達を騙してたのか？」

バツツが驚き、フリオニールが怒りながら皇帝の襟首を掴む。

「人聞き悪い事を言うな！そっちが勝手に勘違いしたのだろう？…全く。コスモス側がピンチという事で攻めに行ったのに…何故、私がこんな目に遭わないといけないんだ…」

ブツブツと文句を言う皇帝にジタンが…

「それはアンタの日頃の行いが悪いからだろ？」

「だいたい、何なのだ？あの男は…いきなり斬ってくるし…笑いなから…」

「あれ？スルーされた？」

「…やっぱり今日のWOLって敵側から見ても様子おかしいよね？」

バッツが皇帝の意見を聞き、WOLの異変を改めて実感する。

「何が原因なんだろう？…また作戦会議を立ててみる？」

「そうしょっか…」

「そうだね。」

セシルの意見にジタン、オニオンナイトが同意する。

「…なあ、さつきから言おうと思ったんだが…」

スコールが遠慮がちに皆に話す。

「何、どうした？」

「…クラウドって何処行っただろうな？」

「……。」

沈黙。

「クラウドならそこに居るじゃないか。」

フリオニールが目を反らしながら皇帝を指差す。

「え？俺え？」

「そうそう、同じ金髪なんだし…何か意見頼むよ？クラウド（仮）。」

セシルが黒い笑みを浮かべながら言う。

「金髪以外は全部違うがな！っくか（仮）って何だ？」

「もう良いだろ？クラウド（仮）…それより作戦会議始めようぜ。」

こうしてクラウド（仮）を加えての3度目の作戦会議は開始された。
余談だがクラウドについてコスモス側は深く考えない事にした（
現実逃避）。

作戦会議＜参＞（前書き）

替え玉事件勃発。

作戦会議＜参＞

「ではこれより、3度目の作戦会議を開始致します。何か意見のある人は挙手して下さい。」

オニオンナイトの進行で手を上げたのは…

「はい。」

「セシルさん、どうぞ!」

セシルだった。

「せっかくクラウド（仮）も来てくれたので囧…ごほっ！盾役をお願いしたら良いと思います。」

「……。異議が無いようなので決定……」

オニオンナイトが会議を纏めようとすると皇帝が凄い勢いで手を上げた。

「異議あり！異議あり！！異議ありまくりじゃ！！！」

「もうう、クラウド（仮）。そんな3回も言わなくても解るから……」

笑いながら言うオニオンナイトは改めて皇帝に意見を聞いた。

「で、意見ある？」

「はい。言い出しつpegが囧になるべきだと思います!」

「却下。他にある人？」

ダメ出しされ焦る皇帝。

「ちよっ…私達は仲間だろ？」

「仲間？…はん。今更何を言い出すやら…」

鼻で笑いながら否定するセシル。

「本来は敵だけど…今は仲間だよな！な？」

負けじと皇帝も必死で自己弁護したが宿敵フリオニールに邪魔されてしまう。

「…コイツ、こう言っけどすぐ裏切るから皆は騙されないように気を付けてくれ。」

「はい。」

ほぼ全員が同意し、絶望する皇帝。

「お前ら〜！」

「おい。何て事を言っただ！俺達仲間だろ？」

そんな中、バッツだけが皇帝の味方になった。

「バッツ…」

「クラウド（仮）。大丈夫！まだ手はある…俺に任せろ！！」

「じゃあ、バッツの意見を聞こうか。」

ジタンが意見を求める。

「ああ。俺って“ものまね士”だろ？だからWOLの前でWOLの真似したら戦意喪失するんじゃないか？」

「おう！確かに。バツツ、お前今日冴えてんな。」

「だろ？俺も言ってるて吃驚した」

本日2度目の誉め合いをする二人。最後にオニオンナイトが皆に確認する。

「それで決定で宜しいでしょうか？」

「異議なし！」

こうして作戦会議は終了した。

特別企画：夏（前書き）

皆様、暑中お見舞い申し上げます。

特別企画：夏

カオス側では無いとはいえコスモス側でも夏は暑かった。

「暑い…なあシャントット、風の魔法を唱えてくれよ?」

バッツが服をバタバタさせながらシャントットに頼む。

「人に物を頼む時は礼儀正しくするのが基本でしょう?」

頼まれたシャントットは不服そうだった。

「……。お願い致します。シャントット様、風の魔法を私めに唱えて下さいませんか?」

バッツは面倒だなと思いつつも丁寧に言った。

「おっほっほ!宜しくてよ。えい、風よ!」

「涼しい…イテ!イタタタ…」

バッツに石が飛んできて体中に傷が出来てしまう。

「攻撃魔法ですからね。当然ですわ!」

威張りながら言うシャントット。

「痛かった。もっと涼しい魔法無いのか?痛いんだけど…」

「貴方、馬鹿ですの?お望みであれば一生凍らせて差し上げましょうか?」

バツの願いに呆れながら邪悪な笑みで告げるシャントットに…

「もう、良いです。」

バツは丁重に断った。

―終―

特別企画：夏（後書き）

私の中でバツは阿呆の子になっています。

手の鳴る方へ…（前書き）

打倒WOLプロジェクト始まる。

くキーワードく

・バッツの本気

手の鳴る方へ…

皇帝を縛っていた縄を解き（と言っても手は前回自分で解いたらしい）WOLが来るのを待つ一同。

「おい、皆。WOLが居たぞ！」

ジタンが皆に声掛けフリオニールが合図する。

「じゃあ、例の作戦開始だな！」

「頼むぞ。バッツ。」

「君だけが頼りなんだ。」

「死ぬなよ。」

スコール、セシル、皇帝がバッツに呼び掛ける。

「おお！皆、有難うな！！…それと、もし失敗したら皆逃げてくれ。」

バッツも皆の期待に応えるが如く明るく努めた。

「…うん。解った。」

「お前も気を付けてな？」

「ああ…じゃあ行ってくる！」

オニオンナイト、ジタンも応援し…バッツはWOLの前に登場した。

「お前は…」

WOLは驚いた表情でバッツを見る。

「よう、WOL。今からお前の真似をしに来たぜ！早速だが“ものまね”開始！！」

バッツのものまねスタート。

「黄色いのじゃない…まあ良い。望むなら相手をしよう…はははは。」

「（前略）相手をしよう…はははは。」

「どうした？かかって来ないならこっちから行かせてもらっぞ！ヒヒヒ。」

「（前略）ヒヒヒヒ。」

次のものまねをする前にWOLが攻撃を開始した。

「とりゃあー！」

バッツの頭にクリティカルヒット。

「バッツ！」

「今は駄目だ！」

「そうだよ。今は様子を見よう。」

ジタンが心配するが慌ててフリオニールとセシルが止める。バッツはヨロヨロしながらも何とか体制を整えた。

「ふん！こんな攻撃で倒れたら、こっちもやる気削ぐからな…はははは。次の攻撃はどうか？」

「（全略）」

「何だよ？お前、さつきから私の真似をして…ええい！虫酸が走る！！虫酸が走る！！！」

WOLがバツツに向かって2度3度…否、何度も頭に向かって攻撃した。

「へん！ざまあみろ！！私の真似をするからいけないのだ。…うん？」

WOLがバツツを見て一瞬怯んだ。

「……。は……。」

「？」

「あつははは。黄色いの、何処かな？」

頭の攻撃でバツツは混乱し…

「…うわーい 仲間だ！…一緒に皆殺ししに行こう？」

「うん。黄色いの確か、あそこに居たよーな…発見！」

「あ！本当だ。黄色 黄色 あの娘を思い出させる色」

「さあ、サクツと逝っちゃって」

皇帝の前に二匹の鬼が笑いながら近寄ってくる。

「うわあ！誰か…ってアイツらいつの間にあんなに遠くに…」

そんな彼を見てWOLとバツツは無情にも剣を振り下ろす。

「じゃあね！」

「バイバイ！」

「うう…うぼあ〜〜」

こうして、脱落者4名になり鬼も増えた。

手の鳴る方へ…（後書き）

予告通りある男のせいで悪化しましたとき。
バッ

野バラは美しく散る（前書き）

殺戮の舞台男優ウオーリア・オブ・ライト。彼は殺人を犯す事三度に渡り、そのキレっぷりには多くの奇怪な行動を残したまま…未だ完全には正気に戻ってないのである。

バツ・クラウザー…WOLの真似をしていた所。WOLによって頭を殴られ、混乱。敵と味方の区別を間違え、その後バツは現場にて完全に敵になった。

〈キーワード〉

- ・ 檻の中の花
- ・ 空中フルボッコ

野バラは美しく散る

「あらずじ長えよ！…しかし、まさか頭ばかり攻撃とはいえ、こんな結果になるとは…」

ジタンが吼えるように隣で走ってるセシルに言う。

「黄色のオッサン、盾役にもならなかったね。無能って強ち間違ってたかった。」

「これからどうする？鬼が2匹ともなれば厄介だぞ？」

スコールが後ろから問い掛ける。

「ああ…そうだな。…俺が盾になるから皆は逃げろ。」

最後の列に走っていたフリオニールが立ち止まる。

「え？フリオ何を…」

オニオンナイトが言ったが、ジタンが遮る。

「…解った。死ぬなよ？」

フリオニールは皆を逃がし自ら盾役になった。

「俺が相手だ。」

フリオニールが堂々と宣言すると…

「もう 邪魔しやがって…つまんねえな。」

WOLが苛々しながら言うとバッツが…

「WOLっち、先行けよ?…すぐ追い付くからさ?」

「うん、解った」

「タダで行かせると思うなよ?」

WOLの行く手をフリオニールが遮ろうとしたがバッツに邪魔される。

「相手はこっちだよ?…えい!」

「何?…うわああ…。」

バッツがフリオニールに向かって攻撃する。

「一丁上がり」 空中に上げてしまえばウエポンマスターなんてチヨロいね」

「何だと? 貴様…」

「本当の事だろ? 地上しか武器使えない癖に」

バッツはフリオニールに空中コンボを連発し、トドメを差した。

「…終わらないでくれ。」

「これで5匹 イヒヒヒ…WOLっち今からそっちに行くからな?」

一方逃げつつも様子を見てたジタン達は…

「あれ…俺の技をアレンジしたやつだ。エゲツねえ…」

ジタンは引きながら言うつとセシルもバトルについて辛口評価する。

「空中だとフリオは魔法しか使えなくなるからね……」

「おい、ネギ！お前は足早いから先に逃げる。」

スコールがオニオンナイトを促すが当の本人は戸惑っている。

「え？でも……」

「逃げられる内に逃げとかなないと後でやられるぞ？スコールの言う通りにしろ！」

「そうだよ。フリオも倒されたんだ！僕らが君を守る保証も無い。ネギ、早く。」

ジタンとセシルもスコールに同意しオニオンナイトも決意を固め……

「……うん。皆も無事に逃げて！」

「ああ。ネギ坊も気を付けてな！コスモスが居たら匿ってもらえよ……」

ジタンがオニオンナイトに言うつと彼は自慢の早足で去っていた。オニオンナイトが見えなくなった所でスコールが……

「……お前らも先に行け。どうやらWOLが追い付きそうだ……」

「スコール！君まで……解った。気を付けて」

「ああ。」

セシルが心配したが最早一刻を争う事態にスコールに従う事にした。

次回、スコール vs WOLのバトル開始。

野バラは美しく散る（後書き）

フリオは空中になった途端に無能になりますね…本当、お前の武器は飾りかと言いたくなるくらいに…

余談ですが私はSound Horizon好きです。「檻の中の花」とかミシエル系はマジで名曲！

相棒（前書き）

次々に犠牲者が増えていくコスモス側（と一部のカオス側）…果たして、スコールは惨劇を止められるのか…

〈キーワード〉

- ・召還
- ・ゲスト出演

相棒

「獲物発見 次の獲物はお前だ〜！」

WOLがスコールを指差しながら叫ぶ。

「…俺のセリフを吐き出しやがったよ…アイツ…」

聞こえたジタンは小声で突っ込んだ。

「かかって来い、俺が相手になろう。」

スコールがWOLの前を立ち塞ぐ。

「君は一人かい？なら好都合。…行くぞ〜」

スコールvsWOLのバトル開始。スコールはWOLの攻撃を避け挑発する。

「ふん！その程度か？」

「何を〜！コイツ！！当たれ！！！」

「そこだ！」

WOLがスコールの攻撃を喰らい、カウンターをするが当たらない。

「ぐあ〜！畜生！！何で当たらないんだ？不愉快不愉快。」

「捉えた！トドメ！！」

物陰に隠れ様子を見てるジタンとセシルがスコールの優勢に喜ぶ。

「へえ、スコールやるじゃん！」

「これなら勝てるかもしれないね？WOLが戦闘不能になれば元に戻るだろうし…何より鬼も減る。」

しかし、喜んでるのも束の間…

「WOLっち！お待たせ！アイツやつつけてきたよ」

「……何！？」

「バツッ！お帰り」コイツ、しぶとくてさ…それより、相棒も連れてきたの？」

バツッが帰ってきて驚くスコールと対照的に嬉しがるWOL。バツッを見るとチョコボに乗っていた。

「ああ。コイツの名はボコ！宜しくな」

「くえええ！」

ボコが「宜しく！」と言わんばかりに鳴く。

「汚ねえ！そんなのありかよ？」

優勢から一気に不利になったスコールが異議を唱えるが…

「一応、インストール画面で出演してたからありだろ？…ふふふ。」

WOLが笑いながらボコの“存在”を肯定する。

「あははは。折角、連れてきたからボコに攻撃を任せてみようぜ？」
「それ良いな！カッコイイ！！」

バツツが自慢の相棒に任せると提案するとWOLが瞳を輝かせながら言う。

「今度はネギ坊かよ」

ジタンが物陰から小声で突っ込んだ。

「くそ！」

絶体絶命のスコール。

「ボコ、やつちゃえ」

「くええええ〜！」

バツツの掛け声と共にボコの凄まじい嘴による突きがスコールを襲う。

「ぐわああああ！」

スコールは倒れ、戦闘不能となった。

「これで6匹 ククク…残りの奴らも片付けなきゃね？バツツ」

「ああ…俺はコイツと一緒に先に逃げたネギ坊を探すよ」

「くええ〜！」

「うん、宜しく！」

バツツはボコ共にオニオンナイトの行方を探る為にその場を去った。
残されたWOLは…

「じゃあ私はジタンとセシルを探すね」

脱落者は6名。ピンチ。

イカ（前書き）

遂にチヨコボ召還という裏技というかバグ技としか思えない攻撃まで出したバツさん。

コスモス：「ある意味、WOLよりコイツの方が厄介なんじゃ……」

（キーワード）

- ・イカロス
- ・ストーリーカー 絶対に駄目
- ・原点回帰

イカ

「ネギ坊…やつと追い詰めたぞ！」

オニオンナイトが走ってるというの間にかバツツが追い付いていた。

「何で…チヨコボに乗ってんのさ？」

「バカ野郎！そこらのチヨコボと一緒にすんな！！ボコもご立腹だぜ！！！」

「くえええ〜！」

オニオンナイトがボコについて指摘すると怒り出す1人と1匹。

「いまいち…怒ってるか解らないよ…」

オニオンナイトが感想を漏らすと…

「解らなくて良いよ…此处で終わるんだから。あばよ ネギ坊。」

「柳沢慎吾！？…うわあああ！」

バツツによって倒されるオニオンナイト。

「コレで7匹…あれ？6？…1匹間違えた？まあ良いや…WOLっちの所に戻ろう」

脱落者7名。ちなみにジェクトは含まれてるがWOLとバツツに殺られてないので数え間違ってしまうバツツ…その頃、ジタン達は？

「いよいよ本格的にヤバくなってきたな…何話か前まではあんなに

和やかに会話してたのに…」

「とうとう僕ら、二人になったね。」

ジタン達はWOLに見つからないように未だに物陰に隠れながら会話をしていた。

「なあ、俺達。あんな奴らに殺されるのかな？俺には帰る場所があるのに…」

「大丈夫だよ。それより…見て！あそこ…」

セシルの差した方向を見るとセフィロスが居た。

「あの人を罠に使おうよ？」

「…お前、身内には優しいが敵にはとことん容赦無いな。」

セシルの言葉に引くジタン。

「だってあっちにはクソ兄貴がいるからさ？」

「…俺はつくづく思うよ…お前が敵じゃなくて良かったと…」

セシルはWOLに見つからないようにセフィロスを呼ぶ。

「おい、ストーカーさん。」

「誰がストーカーか！」

呼ばれたセフィロスは失礼だと言わんばかりに怒る。

「事実だろ？あんなだけ、“クラウド”って呼んでたら…な？」

意見を求めるジタンにセシルも同意する。

「ねえ。…ストーカーが嫌なら堕ちた英雄“イカロス”…略して“イカ”でも良いよ？」

「せめて、本名に近い…“ロス”にしてくれないか？」

「却下。7のラストバトルの時にイカっぽかったから尚更、イカで！」

諦めたのかセフィロスが…

「ああ…もう何とでも呼べ。…それより何だ？」

「ええ…実は僕らWOLに襲われてるんです。助けて下さい！」

即答で。

「ヤダ。何で私がお前らを助けねばならないのだ。」

「勿論、タダとは言いません！宜しければ…コレを。」

セシルは一枚の写真を取り出した。

「…！？コレは！私の？」

「はい。落ちていたので返そうと思ったんですが…助けて貰えないようなので…」

写真を懐に戻しジタンの元に戻ろうとすると…

「待て待て！解った。協力させて頂こう！！…じゃあ、行ってくる。」

「お気を付けて〜！」

セフィロスがWOLの所に行ったのを確認して…

「何を見せたんだ？写真？」

ジタンがセシルに近付き先程のやり取りについて聞いた。

「ああ。あの人の持ち物をコスモスから貰ったんだけど…要らないから本人に返した。」

「へえ。何の写真なんだ？」

聞くと困ったような顔をするセシル。

「…あの人の想い人かな？取り敢えずアレのせいで僕は散々な目に遭ったからな…ついでにイカさん、散ってくれないかな？」

「……。」

ジタンはこれ以上聞かない事にした。

ヒデオ（前書き）

セフィロスはセシルに嵌められWOLに立ち向かう…

〈キーワード〉

- ・ 英雄の価値
- ・ 贈り物
- ・ セシルの真の怒りの元凶

ヒデオ

「其処の青いの…英雄のこの私が“絶望”を贈ってやろう…」

WOLに立つと宣言するセフィロス。

「ふん！ならば私はクーリングオフにして…お前に“滅亡”を贈ってやろう！あつははは…」

WOLは堂々と返答した。

「返品期間大丈夫かな？」

二人のズレた会話を聞いてたセシルがジタンに尋ねる。

「そこが問題か？…お！バトルが始まったぞ！！」

セフィロスとWOLのバトル開始。

「行くぞ。…斬る！」

「…はっ！」

「何！？」

WOLは盾でガードし、反撃した。

「あつははは…お前の攻撃は残像ばかりで全然当たらないな？早さだけでダメージが無いよ？…ウフフ。」

「くっ！…ならば、こうだ！」

セフィロスが上から自分の体ごと落ちてくる「獄門」という技を仕掛けるが…

「ダメ駄目 そんな技じゃ…避けちゃうよ。」

「何！？…うわあああ。」

技が強すぎた為か地面に穴が開き、そのまま落ちた…

「うわゝ、だつせゝ！そのまま埋めちゃおうかな」

「待ってくれ！…くそ、出られない。」

暫く何をするか考えてたWOLが思い付いたように…

「うゝん、そゝだ！穴の中に石を投げつけちゃおう」

セフィロスの居る穴の中に沢山の石を投げる。

「イタタタタ…。痛い痛い痛い！クソゝ！！」

セフィロスは穴の中で息絶えた。

「これで7匹目。残りはどつちかな？…何処に隠れてる？出てきやがれ！」

様子を見てたジタンとセシルは…

「今までで一番、弱かったね？…英雄じゃなくて“ヒデオ”の間違いだっただのかな？」

「そうかも…あの人、多分頭の中がクラウド一色で出来てるんだろうな。Lvが1しか無かったぞ…」

「何か…見かけ倒しだったね？あの剣捌きも…あれなら僕がWOL

に挑んだ方が良かったな……」

セシルが立ち上がってWOLの方へ向かう。

「…行くのか？ だったら俺も……」

「大丈夫。君は隠れてて……」

「でも！ バッツが戻ってくるかもしれない。アイツはチョコボ乗ってるし……」

「心配してくれて有難う。でも平気！ ピンチになったら兄さんを喚ぶから。」

セシルに諭され黙ってたジタンだったが……

「…解った。隠れてるよ……でもその前に、“呼ぶ” んじゃなくて“喚ぶ” んだな？ 兄貴……」

「ああ、召還獣みたいな者だよ？ ……鉄巨人に似てる……っていうか本人？」

「お前：そんなに嫌いか？ 兄貴。」

「別に嫌いじゃないよ？ ただ……友人を2度も操って僕を嵌めたり、騎士団を退団させられたり、恋人を攫ったり、王様を殺して替え玉用意してた事とか全然怒ってないから……」

（……。絶対根に持ってる。）

次回、セシルがWOLに挑む。

ヒデオ（後書き）

実は4を未プレイだったりしますが、プレイ済みの友達に読んで貰い「合ってる」と言われてるので内容は大丈夫だと思います。

キャラガイド見て調べて書きました。

メイク アップ（前書き）

弟組が生き残ってしまったコスモス側：鬼に立ち向かうべくセシルが動き出す。

～キーワード～

・血祭り（前夜祭）

メイク アップ

「じゃあ、もう行くね？もし、やられたらジタン…君だけでも逃げ切ってくれ。」

ジタンに背を向けながら言うセシル。

「…今更だけど、何か塊魂みたいに巻き込んでゴメン。」

「…気にしないで良いよ。WOLとは戦ってみたかったし…何よりWOLの精神鍛錬が足りないからいけないんだよ？君のせいじゃない。」

厳しいセシルの意見に…

「……。セシルってさ…言いにくいけど味方でも敵になると言葉に容赦ないな？」

「そう？もしそうだとしたら…色々経験したからだと思う。」

少し沈黙し…

「……。そうか…。」

「…じゃあ、行くね？」

「…ああ、死ぬなよ！」

セシルがWOLの前に現れる。

「ほ…う、バツが帰ってくるかもしれないのに一人で挑むとは…」
「一人でも大丈夫だよ？君達と違ってね？」

（本当に容赦無い…）

様子を見ているジタンが心の中で突っ込む。

「何だと！このー！絶対泣かしてやるー！！！！…とその前に…」
「？」

「ちよつと待つて。…変身」

WOLは赤い甲冑…アナザーフォームに着替えた。

「そろそろ汚れてきたからさ…アナザーだと赤いから血も目立たないしね」

新しい服に着替えWOLは御満悦のようだ。

「血祭りなのに目立たなくて良いのかい？」
「うん だって…血で汚れるのは…」

セシルを指差し…

「お前だ・か・ら！」

「……。遠慮します。」

顔色が悪くなり全力で否定するセシル。

「遠慮しなくて良いんだよ？…あと欲を言えば暗黒騎士より血が目立つ白いパラディンの方が良いかな？」

（僕、パラディンの方が慣れてるけど…これだと暗黒騎士で戦わないといけないかも。）

「だ・か・ら 大人しく沈め！」

戦闘開始！

メイク アップ（後書き）

衣装が赤で初めはネギ坊が予定でしたが…結局壊れ放しのWOLに。

s t a r d u s t (前書き)

セシルは汚さず、あまり慣れてない暗黒騎士でWOLに勝てるのか…

くキーワードく

・ 赤

・ 量産型球体

s t a r d u s t

「あつははは…いざ参らん。」

「来るな！」

セシルはWOLに向かって黒い球体グラビティボールを放った。

「…くつ。邪魔臭い…」

黒い球体を空中で避けながらセシルに近付こうとする。

「君は接近しないと攻撃出来ないからね。空中なら尚更…地に足を着けたら魔法を使われるから悪いけど…」

「ムカつく…！下に降ろせ！！」

「嫌だね。僕だって慣れてない姿で戦ってるんだ。これ位しないと僕が不利になってしまうだろう？」

WOL防止用の球体を何度も出すセシル。

「き…！邪魔…！！」

「今だ。えい！」

セシルは闇を走らす技を使いWOLは大ダメージを食らった。ダークフレイム

「ブレイブを貯めていたからね？それにしても…運が良いね？ラストリーブが発動したお陰で助かったね。」

「うぬぬぬ。」

WOLのHPが赤くなる。

（よし、あと1撃。これなら勝てる！）

セシルは黒い球体を放った後、パラディンになり白い放射状の物体パラディンアーツの攻撃をしようとした…が。

「…この時を待っていた。」

WOLが盾を放り投げた後光を放った（ルーンセイバー）。

「何！？…うわあ。」

「これで終わりだと思ったのか？甘い！」

WOLはEXモードになりHPを回復しつつ追い詰めていく。

「行くぞ。あつはは〜！」

（いつの間にEXバーを貯めてたんだ？それにこの強さ…タイプは逆境か！）

「じゃあ、そろそろ…決め技発動」

（ヤバイ。）

「お揃いね〜、私達。これでお揃いね〜、ああ幸せ！」

（サンホラ！しかもstardustだと！！）

Sound Horizonの怖い歌詞を歌い出すWOL。

「技発動はもう止まらない」

（そろそろ兄さん喚ぼうかな？本当に…）

「血で赤くなってきたね？でも…何故…何故なの…何故死なないの」
「！」

（…どうしよう）

考えると不気味な笑みのWOLが…

「ウフフ…。無駄だよ。君のお兄さんはバツツが片付けてるから。」

「何だって!」

「ククク…喚ぶと思ったから手配しちゃった…それじゃあバイバイ」

「サーフィス!サンホラは?…うわあああ。」

「残るは1匹…さあどうする?」

ジタンが隠れている所を見つめながら呟く。

「ど、どうしょ?」

果たしてジタンの運命は?

s t a r d u s t (後書き)

今回は技名を括弧にして書いてます。ただ最近してないので攻略本で調べながらなんで不安です。

化け猫（前書き）

ジタンがピンチになる少し前：クジャが女装の為に気合いを入れていた。

〈キーワード〉

・年齢

・PS

・汁と汗

化け猫

「かくかくしかじか…なんで！化粧道具を貸してよ？」

首を傾げながらお願いするクジャ。

「何で私の所に来るのよ？暗闇の雲に借りれば良いじゃない？同類なんだし…」

対するアルティミシアは凄く嫌そうに答える。

「あの人が持つてると思ってるのかい？だって中身は女じゃないかもしれないんだよ？仮に女でも…もう皺苦茶の婆だよ？きつと…」

ウンウンと頷きながら想像する。

「そうかもしれないけど…私みたいに顔や体中に模様があるから持つてんじゃない？化粧道具…」

「多分、それ…化粧道具じゃなくて絵の具だろ！もう、ドモホルンリンクルに頼ってるからって…恥ずかしがらなくても。」

「頼ってねえよ！時間を操れるから年齢くらい止れるわよ！！」

クジャの言葉に猛烈に怒る。

「じゃあ、何でそんなに老けてんの？もつと若くすれば？」

「この外見（年齢）が気に入ってるからよ！老けてません！！」

ハアハアと撒くし立てながら反論するアルティミシア。

「もーっ、年齢の事になるとすぐ、ヒステリックになる…これだからオバサンは…」

「アンタ、私に喧嘩を売りに来たの？…そもそも、人に物を借りた時の態度が悪いから嫌なのよ！…まあ他にもあるけど。」

「え？態度？普通でしょ？…というか他にも理由あるの？」

理由を聞いてみると…

「…生理的に嫌。アンタが使った後の使いたくない。何か“汁”が付いてそうで…」

「せめて“汗”って言うてくれない？…分かったよ。ふっ…」

黙り出したクジャに…

「あら？やつと諦めてくれた？」

嬉しそうに声掛け、さっさと出て行かそうとする。だが、それより先にクジャが何かを思い付いたようで口を開いてしまう。

「じゃあ、サンプル頂戴！それなら良いでしょ？オ・バ・サ・ンだから持つてるよね？」

「xっ！」

クジャの言葉に声にならない声で怒りだすアルティミシアだった。

「待っててね、ジタン」

こうして、クジャはアルティミシアから化粧道具を貰い女装を始めた。

化け猫（後書き）

女装が完成しアルティミシアに見せに行つて…

「僕は美しいから何でも似合うんだよ？例えば異性にも化けれるんだぞ」

「こつち来んな！ド変態！！」

アルティミシアが扉を勢いよく閉めたのは言うまでも無い。

問題発言（前書き）

ジタンの運命は…

〈キーワード〉

- ・教育
- ・ジタンがキレた

問題発言

「はあはあ、くそ逃げても逃げても追ってくる！此処は東京砂漠か！！」

走りながら呟くジタン。後ろではWOLが追いかけてくる。

「諦める。何処へ逃げても同じ…私は何度でもお前を追いつめて追いつめて痛めつけてやる！」

凄じいオーラを発しながらジタンを追いつめていく。

「ひいつ、怖え〜！…アンタ、俺に何か恨みでもあんのかよ〜！」

「恨み？そんなモノは無い…ただ、私を侮辱した罪は重いぞ？…クク。」

「あるんじゃないか！侮辱たつて事実なんだから仕方無いだろ〜！」

ジタンの言い分に納得出来ないという表情をして反論する。

「事実？そんな訳無かろう？私は皆から愛されるリーダーさ」

「……。普段ならリーダーとして認めるけど…今は絶対認めねえ。」

「ほ〜う？認めないとは…さては貴様リーダーの座を奪いにきたな！渡さないぞ？」

剣をジタンに向けながら言うWOL。

「違うし！要らないから！！…だいたい、あの時はアンタが女の子を苛めてたと思ったから止めに入っただよ。」

「苛めてない。」

「アレを苛めじゃなければ…何だ？」

ジタンの問いに暫く考え出した答えは…

「調教？」

「……。てめえ、本当に何やってんだ？」

「間違えた。説教だった…剣を使って。」

「凶器を使ってる時点で説教は違うよな？この野郎！」

ジタンは足を止めてWOLに向き直る。

「女の子を泣かしやがって！許せん！！」

実際は泣いてないし、女ですら無いクラウドを庇うジタン。

「何を怒ってるのだ？狩られる側なのに…こっちが怒りたいわ！」

「うるせえ！バツが来ようとてめえだけは絶対倒す！土下座しやがれ！！」

「ふん！望むなら相手をしよう」

ジタンvsWOLのバトルに突入。果たして軍配は…

ジタンvsWOL（前書き）

どっちが勝つかな？

〈キーワード〉

- ・金八先生
- ・駄洒落

ジタン vs WOL

「本気出しちゃうぜ！」

「やれるものならやってみるが良い！」

ジタンとWOLのバトルがスタートした。

「ほっ！」

「すばしっこい！攻撃当たらない〜！！」

ジタンはWOLの攻撃を避けつつ自身も攻撃する機会を窺う。

「盗賊なめんなよ？攻撃に力は無くても早さはあるし何度もすれば蓄積する。」

「はっ！」

「こっちこっち！遅いよ！！」

WOLにダメージを与えるジタン。

「くっ…！これなら…」

「何？今度はティナちゃんのセリフ？でも当たらないぜ。」

「むむむむ〜！だったらコレで！！」

攻撃を避けきれず当たってしまう。

「イテ！…やるじゃん！！じゃあ、これは避けられるかな？…はっ
！！！！」

「なっ！光弾が飛んで…」

光弾を避けられないWOLに対し着実にダメージを与えブレイブを溜めてたジタンはトドメを刺す。

「…そろそろかな？じゃあなリーダー！飛んでけー！！」
「うわあああ！」

ジタンのHP攻撃が決まりWOLに勝った。

「どんなもんだい！さあ、あの娘に謝れ。この野郎！！」
「嫌だよー！いーだー！！」

口の両端を手で引っ張り舌を出すWOL。

「良い年こいた野郎がやる事じゃねーよな？てめえ、いい加減にしねえと…」

その時、ガサガサと物音がし…バツが帰ってきた。

「よう！ジタン…WOLをよくも苛めてくれたな？」
「嘘ー！折角、追い詰めたのに…」

あと一息という所でバツが戻ってきてジタンの顔に血の気が去っていく。

「うわーん、苛められた！」
「よし、ボコ。ボコボッコにしてやれ！」
「くえええー！」

バツの指示でジタンに向かって攻撃をするボコ。

「イテ！くそー！！」

「顔は止めときな！ボディを狙えよ！！」

「金八先生！…ちつくしょー！！」

「逃がすか！」

何とか逃げてみたものの、戦闘のせいか体力は尽き始めるジタン。
彼の運命は？

ジタンvsWOL（後書き）

久し振りの更新です。申し訳無いです…

気付いた方も居るかと思いますが「話目（受難は〜）を繰り上げてアンケートの話を書きました。4分割を無理矢理纏めたので文章は変です。宜しければ読んでみて下さい。

カオス編は終わったら書きます。

ショック療法（前書き）

頑張れジタン。

くキーワードく

- ・ボコ還る

- ・誰か登場 帰れ

- ・

ショック療法

「ケケケ！もう、逃げられないぞ？」

「あはあは！私を苛めやがって…」

バツとWOLに追い詰められたジタン。

「その笑いは…あさき！？…ハアハア、くそっ！」

バツはボコに嘴攻撃の準備をさせ、WOLは剣を構えジタンの上に振り下ろそうとしている。

「じゃあな！」

「バイバイ！」

ボコの嘴がジタンに降りかかろうとした…その時。

「僕のジタンを苛めてるのは何処のどいつだい？」

「…！？」

“誰か”がジタンの前に現れ二人は驚き攻撃を止めてしまう。

「お前らだよ！」

その“誰か”が一喝するとボコが狼狽え始めた。

「くっ…くっ…くええっ！」

ボコは“誰か”に恐れをなしたのかバツを振り落として逃げてい

た。

「助かった！…ふゝ、誰か知らないが有難…」

ジタンは助けてくれた“誰か”に御礼を言おうとするが固まってしまう。

「ふふふ。ジタン、見て！美しく生まれ変わった僕を…」

其処には女装した“誰か”が立っていた。

「…お前、クジャ？何つゝ格好してんだ？喋り方は…にしおかすみこ…なのに、格好はエドはるみ？」

「君の中の人繋がりさ 可愛いだろ？」

同意を求めるクジャに青筋を浮かべながら即答で…

「気色悪い。つゝかエドはるみじゃなくてエドワード・エルリックだから！」

「え？違うのかい？己、騙しおつて！」

「無双口調！そもそも、騙してねえよ！！…何しに来たんだ？お前…」

本当に疑問だったので聞いてみた。すると…

「君にこの姿（女装）を見て貰う為に会いに来たよゝ！ぐゝ」

「よし！今すぐ帰れ！！二度と来んな！！！」

笑顔で毒舌を吐くジタン。

「…酷い。」

クジヤは泣きそうな顔でジタンを見ると…

「確かに今のは酷いな？」

「ジタン、今のは酷いぞ？」

いつの間に正気に戻ったのかWOLとバッツがクジヤと一緒に抗議する。

「そ〜だ、そ〜だ！僕に謝れ。」

「謝ってはど〜だ？」

「取り敢えず、謝つとけ？な？」

三人がジタンに謝れコールをし始めた。

「うるせえ！つゝかアンタら何、混じってんの？さっきまでアンタらのせいで色んな人がエライ目に遭ったんだぞ？寧ろ、お前らが謝れ！！」

謝れコールに異議を申し立てるジタン。WOLとバッツのせいで味方も敵も壊滅寸前まで追い込まれたのだから至極、当然である。だが…

「エライ目は僕のせいじゃないから謝らなくて良いよね？」

…とはクジヤ。確かに先程来た彼は無関係であるが格好が格好なので謝るべきである。

「何の事だ？私はさっきから此処に居たではないか？」

青鬼状態を全く覚えてない全ての元凶…WOLは無関係と言わんばかりに抗議する。

「WOLが暴れたせいだろ？俺のせいじゃない。」

バツは途中から混乱状態になった為、ある意味被害者であると同時に加害者なので謝らないといけない。

三人の言い分にジタンは…

プチ！

…キレた。

「お前ら纏めて吹き飛ばや！」

ブレイク技の竜巻を発生させる。

「どひゃああ〜！」

三人は悲鳴を上げながら風になり星になった。

こうして、青鬼事件は無事解決。余談だがバツとWOLはジタンに3日ほど口を利いてもらえなかった。

ショック療法（後書き）

今回で第二部終了です。

次回は番外編をして最終部に行こうと思います。

番外編：それから…＜前編＞（前書き）

青鬼事件から3日後の話…

〈キーワード〉

- ・ ツンデレ
- ・ 兄組

番外編：それから…<前編>

「おい、ジタン。ゴメンってば！セル達に何があったか聞いたから…すまなかった。この通り許してくれ！！」

バッツが手を併せてジタンに謝る。

「…もう怒ってないよ。こっちこそゴメンな？物真似なんか無茶振り頼んで…」

ジタンも流石に3日経ったのか機嫌が直っているようで、逆にバッツに謝ってきた。

「え？別に良いよ？WOLの真似楽しかったし？」

「楽しいって…あんだだけ酷い目に遭ったのに一言で済ませるなんて…懐でかいなお前…」

バッツの言葉に驚くジタン。

「俺、退屈嫌いだから。人生は山あり谷ありだよ！」

「…本当に凄いなお前。」

多分、見習ってはいけないんだろうけど…

「そうかな？…ねえ、WOLやクジャの事まだ怒ってる？」

「WOLは青鬼って言った俺も悪かったからな…クジャは…」

「クジャは？」

問い掛けられたが、間が開き撒くし立てるように…

「…女になれば俺が誰にでも声掛けられるのが腹立つ。」
(実際そうなんじゃ…)

「だいたい似合ってたねえし、化粧ケバすぎ！…ああ、思い出しただけでムカつくー！！」

思い出したのか、頭をクシャクシャと掻くジタン。

「まあまあ。落ち着けて？思い出させて悪かったよ。」

バツが宥めにジタンに駆け寄る。

「……よ。」

「？」

聞き取りにくかったので近付いてみると…

「…本当はもう怒ってないよ…全部。ただ会うなら…会いたいなら普通の格好で来れば良いじゃん…」

「…うん、そだね。」

相槌を打ち、安心する。

「俺が怒ってるのは女装をした事…態度もでかかったけど…いつもの事だし…って、何言わせてんだ！今の無し！！」

(ツンデレ。)

ジタンは顔を真っ赤にして走り去っていく。そんな二人を物陰で見る男達が居た。

「良かったな？怒ってなくて…」

ゴルベーズが傍らの人物に問うと…

「…べつ、別に。ジタンが寂しがつてないか見に来ただけだし！」

「…血は繋がって無くても似てるな。流石兄弟。」

ウンウンと感心する。

「…そうかな？じゃあ用事済んだし帰ろうかな…」

帰ろうとするクジャに…

「…私の用事が済んでない。」

「え？」

「あの一件（弟を女装させようとした事）以来、口利いてくれな
いのだ。この前も撤回しようとしてたら、チョコボ乗った奴に邪魔
されるし…」

しょんぼりとしながら独白するゴルベーズ。

「…それはアンタが悪いだろ。普通、弟に女装させるかな…」

「女装したお前に言われたくないわ！…冗談のつもりだったのに…」

本当は女装させる気満々だったが。

「…ドンマイ。」

「…という事で付き合ってくれぬか？」
「嫌。」

即答。

「お前の弟、見に行くの付き合ってやったる？」

「頼んでないし。」

「……。」

泣き始めるゴルベーザ。

「なっ…泣くなよ。解った…解ったから！協力するから！！」

「本当か？」

「うん。じゃあ、あそこにいる君の弟を連れて来るね？」

「え？ちよっ…待て！」

こうしてクジャはゴルベーザの制止を振り切ってセシルを連れてきた。果たしてセシルから許しは貰えるのだろうか？ゴルベーザの運命は…

番外編：それから… <前編> (後書き)

初めてのツンデレ…きっともう書けないツンデレ…だって、未だに
ツンデレの意味を分かってませんものorz

ツンデレって何さー！

<後編> (前書き)

果たして仲直り出来るのか…

〈キーワード〉

・ガリ

・012

・兄弟

<後編>

「で？何しに来たの？」

セシルは明らかに嫌そうな顔をしゴルベークに対して文句を言う。

「謝りに来たのに…何だ？その態度は！」

「謝りに来たんならこの位の事で怒らないでよ？馬鹿が…」

「き…貴様！」

怒るゴルベークに溜め息を吐き…

「はあ…新作にはローザと出たかったな…寄りによつて勝手に僕に嫉妬した挙げ句、馬鹿に操られたガリが出演なんだよ！クラウドが羨ましいよ…」

ボヤクセシル。

「…ガリじゃなくてカインだろ？セシル。お前達親友だろ？」

「親友じゃないよ！ローザにまで手を出したんだよ？しかも“二度”操られてたんだよ？本当、馬鹿だよな？」

遠回しにゴルベークを責めるセシル。

「仕方無いだろ！私だってゼロムスに操られてたんだ。こっちも被害者なんだぞ！！」

ゴルベークの言葉に鼻で笑う。

「自分で被害者って普通、言っかな？じゃあ、僕も被害者だよ。」
「…。」

黙ってしまふ。仲直りに来たはずが溝が深まるばかりで一向に進まない。

「はあ…。」

セシルは溜め息を吐き…

「結局、何しに来たの？」

「だから、お前に謝りに…。」

「もう、良いよ。帰る…。」

セシルはゴルベーザの元から去っていく。

「待て！セシル！！」

無視。

「コラ！待たないか！！」

走って腕を掴む。

「！…離せよ！！」

「話を聞かないか！セシル？」

ゴルベーザは腕を掴んだ時にセシルの顔を見る。その顔は泣いていた。

「どうしたんだ？セシル。」

「煩い！僕だって…仲直りしたいよ。」

涙をボロボロ流しながら…

「でも、顔を合わせたらきつと文句言っただろって思ってた。やっぱりそうだった。」

「セシル…」

「だから、もう会つの止めよう？お互いの為にも…」

（…違う。何かを言わないと…）

「さようなら…」

ゴルベージに背を向け再び去ろうとするセシルに…

「すまなかった！私が悪かった！！」

手を掴み此方に向けさせるゴルベージ。

「ほんの…悪ふざけだったんだ。楽しめたらって思ってた…」

「…。」

「ゴメンな…辛い想いをさせて…」

「…。」

暫く黙っていたセシルも…

「僕こそゴメンなさい。兄さんの方が一番の被害者なのに傷付く事を言っ…」

ゴメンなさい。ゴメンなさい。

泣きながらペコペコと頭を下げるセシル。

「もう、良い。顔を上げなさい。」

動きを止め顔を上げる。

「何て表情かおをしてるんだ。」

涙を拭い、頭を撫でるゴルベーザの動作は何処か懐かしかった。

「もう、子供じゃないよ。」

「…やっと笑顔になったな。」

ぎこちないけど笑いかけてくれたセシルに嬉しくなるゴルベーザ。
静かに諭すように話す。

「…私は人を殺めすぎた。その罪を忘れない為の“ゴルベーザ”だ。
お前が気に病む事じゃないし、お前の言った事は操られたとしても

“事実”だ。」

「でも…」

「しかし、弟に心配させるとは私も兄失格だな。」

撫でてた手を止め、歩くゴルベーザを今度はセシルが止める。

「待てよ！兄さん！！」

手を掴み…

「そりゃあ、たった一人の兄弟だよ？僕だって心配する。」

「…っ！」

ゴルベ―ザは驚いて、嬉しそうに…

「（心配されるのも悪くないな…）有難う、セシル。」

「どういたしまして。でも、もう二度と女装なんて馬鹿な事を言わないでね？」

小指を差し出し約束を交わした兄弟は無事仲直り出来た。

<後編>（後書き）

自分で自分の首を絞めました。今回、せっかく新作出たのだから「新しく書き起こそう」と思ったのが間違いだった。しかも話が微妙だし！

期待してた方がいらっしやったらすみませんでした！

酒は飲んでも吞まれるな（前書き）

青鬼事件から3日後の夜。

くキーワードく

- ・ 酔うと色々ある
- ・ ギャップ
- ・ 苦勞人セシル

酒は飲んでも吞まれるな

「今日は日頃頑張ってる貴方達に御褒美を持ってきました」

コスモスが持ってた袋からは沢山のお酒が入ってた。ワイン、ブランドー、酎ハイなど種類は様々ある。

「メンバーは、俺とセシルとフリオとWOLとバッツか…」

クラウドが集まったメンバーの顔を見回す。

「他のチビ共は？」

「未成年なので置いてきました。お酒は20歳から！」

バッツが聞くとコスモスは酒があるせいかテンション高めに応えた。

「コスモスは皆で飲もうと言ったのだが…未成年の飲酒は体に良くないから私が止めた。」

（流石リーダー。）

WOLの律儀な意見にセシルは関心した。

そして…

「それでは諸君乾杯！」

コスモスが号令を掛けると…

「乾杯！」

皆で祝杯を上げた。

「旨い。しかし、此処で酒が飲めるとは思わなかった。」

「本当だね。たまには良いかもね…」

クラウドとセシルが飲みながら会話してると…

「うつ…おええ〜！」

フリオニールが思いつ切り吐いた。

（うわぁ…下戸！）

セシルがフリオニールを見て内心ツツコむ。

「こういう奴居るよな？断れば良いのに…」

「フリオ、無理して飲まなくても…」

クラウドがフリオニールを指差しながら言う。セシルはそんなフリオニールの背中をさすってあげた。

「…折角呼ばれたんだ…ちゃんと飲まないと…うぷ！」

「ああ、無理しないで…」

更に吐き続けるフリオニールにセシルは酒を取り上げた。その時…

「ちょっと、フリオ！私の酒が飲めないっての？」

（酔っ払いが来た！）

良い感じに酔っ払ったコスモスが乱入してきた。手には酒瓶を持っておりフリオニールに向かって…

「もゝ、ほら飲ませてやるわよ。」

酒瓶をフリオニールの口に押し込もうとするコスモスを慌ててセシルが止める。

「コスモス、それ以上は！クラウド頼むから手伝って…」

クラウドを探すが何処にも居らず、其処に居たバツツに尋ねる。

「クラウドなら寝るからって先に帰ったぞ。」

（逃げやがった！）

セシルは心の中で泣いた。

「可哀想になフリオ…弱いなら事前にウコン飲んどけよ。」

「あれ？バツツ…君は酔ってないの？」

全く酔った様子の無いバツツを見てセシルは驚く。

「こんな物で酔えるかつゝの。バーボンとか持って来いよな…」

（…酒豪だ！）

バーボン…物凄くアルコール度数の高い酒。それを持って来いと言う。

（凄いなバツツ…）

「うつゝうつゝ。」

（泣き上戸になった…）

吐きすぎたのか今度は泣き始めたフリオニールにバツはコスモスに向かって文句を言い始める。

「嗚呼、泣き出したよ。おい！コスモス飲ませすぎじゃないのか？」

「そんなに事にやいですよ。」

「あらら…すっかり出来上がっちゃって…」

酔いすぎて呂律が多少回らなくなったコスモスを見てセシルは素直に意見を述べる。

「…いい加減にしろよ！フリオが可哀想じゃないか！…」

「りゃって、私のお酒をによめないのが悪いも〜ん。」

「飲めない奴は飲めないの…解れよ！」

二人の会話を聞いてセシルは思った。

（…ああ、分かった。バツは酒豪じゃない…酔ってるんだ…アレで。）

「フリオの分も俺が飲むからくれ。」

（バツって…酔うと意見がマトモになるな。）

普段は見ないギャップを肴にしてチビチビと酒を飲むセシル。すると…

「うう…酷い。フリオの分のお酒まで…WOL、バツに何とか言つてよ…」

自分が楽しくないのか泣き始めるコスモスはWOLに助けを求めるが…それがいけなかった。何故なら…

「ウフフ…バツめこの泥棒が」
(……。デジャブが。)

ほろ酔いだったセシルもWOLの態度に一気に酔いが醒める。

「…うん？お前、コスモスを泣かせたな！許さんぞ」

暴れ始めるWOLにセシルは本気で悩んでいた。

(ああああ。ヤバイ、僕もクラウドみたいに逃げるべきだろうか？それとも止めるべきだろうか？あああ…)

酒の席はWOL…青鬼が暴れてしまい結局はセシル以外も皆、酔いが醒めてしまう。そして、もう二度と酒は振る舞われる事はなかった…。

「馬鹿だな…適当に逃げとけよ。」

後日談をセシルから聞いたクラウドは笑いながらそんな事を言っていた。

酒は飲んでも吞まれるな（後書き）

これ書いた後に気付いたんですが…フリオは19歳なんです。20歳かと思ってた…っゝ事で無理矢理20歳と言っ事で！

酒を飲む際は気持ち良くマナーを守って飲みましょう。この話のよ
うに迷惑を掛けないよう気を付けて下さい。

あと未成年は飲んじゃ駄目ですよ？マジで二日酔いキツイから…

特別企画：忘年会（前書き）

短いです。そしてネタが超古いです。

くキーワードく

・人形

無茶振りは止めましょう

特別企画：忘年会

コスモス組の成人達が杯を交わしたという情報を聞いたカオスは對抗して忘年会を開いた…。

「…という訳で諸君らの日頃の働きに感謝し、今日は隠し芸大会を開こうと思う！」

（感謝されてねー！寧ろ、罰ゲームだ…）

カオス以外の全員が青筋を浮かべながら思った。

「では、芸を披露する者は前へ…」

カオスが促すと…

「はい。」

「はい。暗闇の雲さん、前へ…」

暗闇の雲が手を挙げ芸を披露しようと準備をする。

「アイツ、勇氣あるな〜。」

「え〜。芸って何すんのかしら？」

クジャとアルティミシアが小声で話していると暗闇の雲の芸が始まる。

「一番：暗闇の雲、行きます！パペットマペット。」
（触手に人形被せやがった！）

カオス以外の全員が心の中でツッコむ。

「牛君、餌だよ。」

「わーい、肉骨粉バナラ味」

暗闇の雲の触手AとBが喋り（というか口パクをし）芸はあつという間に終了した。

「どうも有難う御座いました。」

暗闇の雲が一礼をすると、酒も入り良い気分のカオスが…

「なかなか面白かったぞ！流石だな！！」

親指を上にして「グゥ」と褒めていた。

「勿体無き言葉を有難う御座います。」

カオスと暗闇の雲が話してる間、全員は思った。

（何処が？そして、ネタ古っ！）

その後、宴会は朝まで続きカオス組（暗闇の雲以外）はウンザリした。

特別企画：忘年会（後書き）

次回から最終章に突入致します。今年いっぱい本編の方を終了させようと思しますので、もう暫くお付き合い下さい！

ケアル（前書き）

青鬼事件が解決した直後の事…

〈キーワード〉

・暇

・瀕死

・（´・`・（ ショボーンヌ

ケアル

「暇だな。」

ティナはコスモスに安全な場所に連れて来られたのだが、誰も居ないので凄く暇だった。

「誰か来ないかな？隠れてろ…って言うけど、別に何も起こらないじゃない。」

ティナが一人でブツブツ言ってる時だった。

「そこのお嬢さん。私にケアルを掛けてくれぬか？」

「え？きやあああ！」

其処に居たのはボロボロの鎧で今にも死にそうなガーランドだった。ティナは余りの恐ろしさに素早く後退った。

「ちよっ…逃げないで！」

「血だらけの鎧のお化けが出れば誰でも逃げなくなるわよ！」

「お化けじゃない！…お前の所のリーダーにやられたんだよ！！！」

必死に訴えるガーランドにティナはコスモス側のリーダーが出てきたので聞き返す。

「え？WOLが？…敵だから攻撃したんじゃないの？」

「敵とか以前の問題で斬りかかってきたがな！」

「でも、貴方だっていつもWOLに斬り合いしてほしいって思ってるじゃない？念願が叶って良かったじゃない。」

いつも二人の様子を見てたティナが言うと…

「良くね〜よ！儂が望むのは“公平な”斬り合いであつて、“一方的に斬られる”のは望んでない！！」

「まあ！自分はいつとも一方的にWOLに斬りかかつてる癖に…返り討ちに遭つたからって私に当たらないでよ？」

眉間にシワを寄せ不機嫌丸出しのティナ。

「仕方無いだろ？同伴者（皇帝）を探してたら居ないし…我が宿敵本人に言おうにも回復してないから死ぬかもしれないだろ？また斬りかかれたら間違い無く死ぬ。で、辺りを見回してたらお主が居たので声を掛けたんだ。」

長い説明を一気にしたガーランドは息を整えている。ティナは未だ不機嫌丸出しで当然の疑問を投げた。

「何で私なのよ！それに回復くらい自分ですれば良いじゃない！！」
「…儂のケアルだけじゃ足りなかった、もうストックが無い…」

しよぼ〜んとするガーランド。彼は此処まで来る間にある程度の回復をしたが全快には程遠かった。

「……。解つたわよ！はい。ケアル…回復したから…とつと何処かに行つてね。」

「忝ない。礼を言う…有難う。では失礼する。」

ガーランドは回復してもらつと急いで何処かに消えていた。

「全く！」

そんな二人を見ていた怪しい陰が此方に近付いている事をティナはまだ知らない。

誘拐（前書き）

近付いてくる足音…その正体は？

くキーワードく

・ゲスト2

ただし扱いが酷い

誘拐

「やあ！僕ちゃんが君を迎えに来たよ」

表れたのはピエロの格好をした男だった。

「ケフカ！何しに来たの？迎えに来たってどういう事？」

意外な人物に驚くティナ。

「君を我が軍に連れ戻す為に来たんだ。僕と一緒に全部破壊しませんか？」

いつもの調子で聞き、また断られるだろうと思ったが…

「…普段なら断るけど、良いよ！」

「え？マジで？誘うって何だけど…もっと拒もうよ？」

いつもと違い誘いに乗ってくれたのでやや戸惑うケフカ。

「暇なのよ。暇で暇で…暇潰しをどうしようか考えてた所よ！まあ奇抜な格好のアンタには解らないでしょうけど…」

「お前どんだけ暇と抜かすか！破壊活動を暇潰しって実は危険人物？」

「誘ったの…アンタだろ。危険人物ってどういう意味よ？」

危険人物と言われ不機嫌になるティナに少し圧されるケフカ。

「そりゃあそ〜ですが…危険人物は言葉の通りでしょ？」

「あのね？誰が破壊活動をするって言った？」

「違うの？」

「私はアンタがカオス側に連れて行くって言うから仕方無くお誘いに乗った訳！」

理由を説明するティナに対しケフカは完全に引いてしまう。

「もう、暇で暇でモーグリをフカフカにしすぎて破裂しそうだったのよね…」

ティナの手元を見ると其処にはパンパンに膨れ上がり今にも破裂しそうなモーグリが居た。

「モーグリに対して破壊活動をするな！…あ、それ以上は止めたげて！！中身出ちゃう！！！」

未だに膨れ続けるモーグリ…

「苦っ…苦ポ！」

「なっ、鳴き声が…苦しそう！」

「早くしてよね？でないとモーグリ破裂しちゃうじゃない？」

「解りました！さっさと参りましょう！！！」

これ以上モーグリに被害が出ては可哀想だと判断したケフカは急いでティナを攫おう、もとい連れて行こうとする。

「…じゃあ行ってくるわね？多分、夕方には戻るから。」

（攫われてるのに態度でかいな。）

「何か言った？」

「いえ！何も。では、参りましょう！！！」

こうしてティナは（便宜上）攫われた。

誘拐（後書き）

テイナの趣味はモーグリをフカフカにする事です（攻略本参照）。
絶対意味違うけどね。

暇だからと言って動物にあたるのは止めましょう。

モーグリ語（前書き）

テイナが攫われた。

くキーワードく

・モーグリが可哀想

モーグリ語

「ティナ！ティナ！！何処に居るの？」

コスモスがティナを探してると…

「ティナ！もう安全になったから出てきて良いのよ？…あら？」

「苦っ…苦ポ。」

「まあ！大変！！暇だろうと思って与えたモーグリが、エライ事に！！！！」

コスモスはモーグリを元に戻してあげた。

「クポ！」

「うん、ゴメン。ティナがモーグリ好きって言うから貴方を一緒にしたんだけど…あそこまでやるとは思わなかった…」

珍しくしゅんとなるコスモスにモーグリはフルフルと首を横に振った。

「…クポ。」

「許してくれるの？有難う。ところで貴方、ティナは？」

ティナの行方を聞かれたモーグリは短い手足を動かし頑張って伝える。

「クッ…クポッ！」

「え？変な格好したオッサンに攫われた？」

「クポッ。」

首を縦に振り同意するモーグリに対し…

「うんうん、貴方が人質にされたので仕方無く付いて行っただけで訳ね…何て卑劣な！人質を取らないと攫えないなんて！！」

勝手に解釈し憤るコスモス。しかしモーグリはボソツと言うように…

「クツ…クポクポ！」

「え？アンタも人の事言えないですって？どついう意味よ！…宜しければさっきの倍、膨らませてあげましょうか？」

「クツ！クポ〜！！」

物凄い勢いで首を横に振るモーグリ。

「嘘です。違います。人違いでした…解れば良いのよ。でも、どうしよ私の軍は青鬼のせいで皆疲れてるし…」

「クツ…クポ…」

「別に、貴方のせいじゃないわ。落ち込まなくて良いのよ？…あ、そ〜だ！」

コスモスが何かを企んだ。機械片手に話してる。この会話は次回明らか…余談だがモーグリの本音の言葉。

「自分から付いて行っただけで！何、面白おかしく自己解釈してるの？悪口だけに勘が良いし…もう知らん。」

モーグリ語（後書き）

きつとコスモスはモーグリ語を理解してません。

次回いよいよ久し振りに主人公登場！

救出要請（前書き）

コスモスが取り出したのは携帯電話だった。まずGPSで場所を確認し、ある人物に電話を掛ける。

〈キーワード〉

- ・奇抜
- ・携帯とPHS
- ・職権乱用再び

救出要請

携帯を掛けるコスモス。携帯から“プルル”と繋ぐ音が聞こえ、途切れた同時に相手が出た。

「はい、もしもし？」

「もしもし？クラウド？アンタ、敵の地域で何してんの？」

掛けた相手はクラウドだった。

「その声は？コスモス！何で俺の番号知ってんの？しかも、PHSの俺より機能が良い携帯使ってるし…」

「ウフフ…貴方の事ならお見通しよ！“神”ですもの！！」

コスモスはお得意の“神”の力でクラウドの番号を探知していた。

「それに神に相応しいのは機能豊富な最新モデルに限るわ」

上機嫌で笑うコスモスに対しクラウドは冷めた声で…

「…用件は何だ？自慢話だけなら切るぞ。」

電源ボタンを押そうとする。

「待ちなさいよ！実はティナが攫われたのよ。」

「何だと！いつ？」

「つい、さっき…そこで貴方にティナ救出を要請するわ。」

いつになく真剣な声で話すコスモスに…

「…解った。出来る限りしてみるよ。」

要請を引き受けた。

「有難う、クラウド！」

「でも、何で俺に？ ティナって俺を嫌ってるんだよね？ 大丈夫か？」

心配するクラウドをよそにコスモスが明るい声で…

「ああ、その事？ 大丈夫大丈夫！ 私がクラウドは貴女を笑かす為にやっただけで伝えたから！！」

「お前、本当誤解を招く発言を…」

呆れてると、コスモスがふふつと笑い出す。

「冗談よ。でも、笑かす為って言うのは本当にティナも勘違いしてるんだけど…」

「ふゝん、まあ怒ってないなら良いさ…ところでティナは誰に攫われたんだ？」

攫った人間の特徴を少しでも聞いておきたかったクラウドだが…

「えゝと、モーグリの話だと奇抜な格好した輩って…」

「超アバウト！ 奇抜なファッションの奴って俺が知る限り4人は居るぞ…」

「知らないわよ！ だって、モーグリがそう言うんだもの。兎に角、さっさとティナ救出してよね？ 頼んだわよ！！」

ブチ！

ツ―…ツ―…と一方的に切られた通話。

「くそ！…地道に探すしかないか…」

P H Sをしまいクラウドはカオス城を目指す。こうしてティナの救出作戦はスタートした。

救出要請（後書き）

ちなみに奇抜な格好の輩はケフカ、皇帝、暗闇の雲、クジャが該当します。

鎧3人は奇抜とは言い難いしアルティミシアとジェクトはこの4人に比べたらまだ良い方です。

ストーカー…ごほ！間違えた。イカ？いや違う…さわら？まあ何でも良いか…セフィロスはアナザーが変態だけど、同じ変態のクジャに比べたらまだ地味かなと。

第一村人（敵）発見（前書き）

救出活動開始。

くキーワードく

この話は“それから”より3日前の話です

第一村人（敵）発見

カオス城に着いたクラウド。しかし城は広すぎて迷っていた。

「適当に捜すしか方法無いな。」

風漬しで捜していると…前方から黒い鎧が表れた。

「貴様は？我が弟の仲を引き裂いた輩！」

「はあ？何言ってるんだ…」

「惚けるな！貴様のせいで私はコスモスに騙され、弟は…」

泣きながら話す黒い鎧…ゴルベーザ。

「な、泣くなよ！俺が何したって？アンタとあまり接点無いのに…」

言われたクラウドは取り敢えず何かしてないか振り返ってみる。

「お前の女装のせいで弟がグレた。私はただ妹を見たかっただけなのに…」

「それ確実にアンタのせいだろ？だいたいコレは趣味じゃないし…」
「7の時はティファ救出の為にしたんだ。勘違いするな。」

冷たく言うと…

「ならば…何故今も女装をしている？趣味と言わずに何と申せと？」

「ごもつともな指摘をされたが正直クラウドも…」

「…解らない。コスモスにやらされた。」

混乱した。今更だがクラウドは未だに女装中である。

「コスモスに？あのクソ女神！何処まで人をおちよくれば気が済むのだ！！お陰でこっちは弟と口利けないのに…」

全ての元凶に憤るゴルベージ。まあ、彼も賛同した時点で加害者なのだが。そんなゴルベージを見てクラウドは…

「…なあ。アンタ、セシルと仲直りしたいんだよな？だったら、謝れば？」

仲直りの提案をする。

「そんな事…出来ればとづくにしてる。でも、一度怒った弟は怖いんだぞ？よく言うたろ…優しい人ほど怒ると怖いつて？」

ゴルベージはブルブルと震えながら想像する。

「確かにそうだけど…セシルは、アンタの弟はちゃんと謝れば許してくれるよ…」

食い下がり再度提案する。

「…果たして、そうだろうか？今回はいつもより怒りが激しいんだ。」

「…じゃあ、3日くらい待てば？もしかすると気が落ち着いてるかもしれないぞ？」

ゴルベージは少し考えて…

「…うむ。そうするか…」

と、納得した。

「何かすまないな勘違いとは言え怒鳴ってしまい、しかも相談にも乗ってもらったし…」

「良いよ。アンタの事はセシルから聞いている…立派な兄だとな？」
セシルがゴルベージの事を誉めていたと聞き、嬉しさのあまり泣きながら…

「お兄ちゃん感激！」

ぶわーっと涙を流しながら感動するゴルベージに対し、クラウドは冷たく言い放つ。

「前言撤回…。空気の読めないバカ兄貴だな？アンタ…」

そして暫く、ゴルベージの弟バカに付き合わされるクラウドであった。

困った時は喚んでね (前書き)

クラウド、ゴルベエザにセシルの話を30分される。

～キーワード～

- ・勘違い
- ・黒ゴル

困った時は喚んでね

弟の自慢話もようやく終わり、半ばウンザリしていたクラウドが本来の目的であるティナの事について聞いてみた。

「そーいえば、アンタの軍の誰かがティナを攫ったんだ？心当たりは無いか？」

「ふむ。私も今帰ってきた所だな……」

ゴルベータは顎に手を当てながら考える。

「チヨコボに乗った輩に襲われていて見てないのだ。」

「そうか……有難う。じゃあ！」

立ち去ろうとするクラウドをゴルベータは慌てて引き止めた。

「待ちなさい。思い出した……確かエクスデスがティナの記憶を無に還して、我々の軍に入れるみたいな事を言ってたような……」

「マジかよ！……早く捜さないと……」

「焦る気持ちは解るが何分、この城は広い。私もティナを捜そう。」

ゴルベータの申し出にクラウドは喜んだ。

「有難う！ゴルベータさん……」

「礼を言うな……困った時はお互い様だろう？それと窮地に陥った時は“ゴル兄”さんと喚んでくれ。駆けつけるから。」

背を向け反対側を捜す為に歩いていく。

「…ではティナを見つけたら君に報せよう。健闘を祈る。」
「おう。何から何まで有難うな！ゴル兄さん！！」

クラウドはティナを攫ったであろう相手…エクステスを探す。するとズシンとゆっくり歩く鎧が居た。

「この野郎！ティナを何処にやった！！」

「うん？…ぐえ！貴様いきなり何を？」

いきなり殴られそうになったエクステスは寸での所で避けた。

「惚けるな！アンタがティナを攫った事は知ってるんだ！！」

「何を言っている？私は攫ってないぞ。他の奴だろ？」

「まだ言い訳を！こうなったら…ティナの居場所を吐くまで殴ってやる！！」

「ぐええ！」

エクステスはお得意の瞬間移動で攻撃をかわしつつ逃げていた。

「くそ〜！アイツめ…歩くの遅い癖に逃げ足は早いな。…待てよ。無に還すって事は…ジタンやティナのあの記憶（女装）も消して貰えるって事だよな…」

クラウドは閃いて、再びエクステスを探す事にした。余談だがゴルベーザが何故エクステスが攫ったと言ったのかは…

「多分、攫ったのはケフカだろうが…エクステスは一度弟との会話を邪魔されたから始末してもらったか…」

自身の鎧の如く真つ黒な理由だった。

困った時は喚んでね（後書き）

ちなみに邪魔された場面ですが、本編のセシルの話の冒頭です。実際はセシルが怒るべきなんだろうけど、ネタが被りそうなので逆にしてみました。

他人の不幸は…（前書き）

自分の記憶の為、必死でエクステスを探すクラウドさん。

～キーワード～

しつこいですがクラウドは絶賛女装中です

他人の不幸は…

必死に行方を眩ましたエクステスだが、とうとう見つかった。
た。

「うわ…見つかった！どうしよう…あわわ。」

慌てまくるエクステスに…

「先ほどは取り乱してしまい申し訳ありませんでした。」

さつきとは裏腹に大人しい態度になるクラウド。

（え？何、この人…急にしおらしくなっちゃったよ？）

エクステスは心の中で引きながらも何故大人しいのか気になったので話を聞いてみる。

「実は貴方をお願いしたい事があり、探しておりました。」

「一応…聞こうか。」

「ある殿方が私をしつこく追い回すのと…ある友人が私の秘密を見てしまったので…」

シクシクと泣き（真似をし）ながら語る。

「娘よ…何が望みだ？」

「はい。二人の記憶…一部を消して下さい。」

暫くの沈黙の後…

「…うん。無理！」

「はあ？アンタ無に還すの得意だろ？何とかしろよ！」

大人しくなる前の態度に戻ったクラウドを見てエクスデスは驚く。

「豹変した！バカ言うな…私は存在を消すのが得意なのだ。記憶など小さいモノなど無理に決まっておろう！！」

「何だよ。役に立たねえな！あんだだけ“無”を強調すりゃ出来ると思っただろ。だから俺達に技の練習台にされるんだよ？」

どんどん態度がデカくなるクラウドに…

「されてないわ！何なのだ！！貴様…さっきから…」

傍若無人さに腹を立て始めるエクスデス。

「出来ねえなら仕方無い。丁度良いや。此処で技磨きでもするかな」
「」

ふっ切れた笑顔で失礼なセリフを言うクラウドに…

「ふん！生意気な…我が片腕になるが良い！！」

勝負を受けた。だが、この勝負…クラウドがひたすらエクスデスを殴る蹴るをし圧勝する。そしてクラウドは知らなかった。ジタンもティナもクラウドの女装など忘れてたり、どこでも良くなっていたりするなど…

「あれ？俺、結局何しにコスモスに呼ばれたんだっけ？まあ良いか

「！」

ジタンは青鬼の強烈なインパクトのせいですっかり忘れていた。一方のティナは…

「暇だな…ケフカ！アンタってドレス着れるのよね？女装してみてよ？」

「え？何言ってるの？お前…」

「はあ？誘ったからには暇つぶしの相手くらいしろやボケが！」

服を脱がし始めるティナにケフカは抵抗する。

「いや！ちよっ…誰か助けて！！あゝれ〜。」

暇すぎてドレス装備が可能なケフカを相手に女装をさせていた。

他人の不幸は…（後書き）

攻略本見てたら7の某イベントの影響でドレスが装備出来るクラウドは兎も角、何故お前まで着れるんだケフカ？マジで。

ゴル まじ（前書き）

エクスデスをボコリ終えたクラウド。 此処でまたある考えが閃いた。

くキーワードく

- ・ 困った時は唱えて下さい
- ・ 雲

ゴル まじ

「そーいや、カオス軍にはもう1人…“無”が得意な奴居たっけ？ソイツを訪ねてみるか？」

クラウドが歩いて探しているところ…

「お！居た居た。うーん、どうやって声掛けよ？そーだ！」

クラウドはその人物に走って声を掛ける。

「スミマセン！その人。」

「うん？お前は？」

クラウドが向かった人物は…暗闇の雲だった。

「助けて下さい！私、道に迷ってしまつて…そしたらあの水色の鎧の人がいきなりナンパをしてきたんです。」

「何じゃと？お前…大丈夫か？」

心配する暗闇の雲に…

「怪我は無いです。鎧の人も諦めてくれたみたいで…ああ。」

嘔泣きをしながら暗闇の雲に近寄るクラウド。ブルブルと震えている彼を心配しヨシヨシと頭を撫でる。

「どうした？怖かったのか？…よしよし、可哀相に記憶を消してやるっ。」

その言葉にクラウドは心の中でニヤリと笑った。

「いえ。私の記憶は消さないで下さい。こゝいう経験をしておかないと次にまた同じ目に遭った時に精神ダメージが大きいでしょ？」

「うむ。一理ある。」

暗闇の雲がクラウドの意見に頷く。

「私、前にも殿方に追っかけられて…他にも友人が私の悲しい秘密を知ってしまったのです。」

「して…その二人の方の記憶を消せと？」

「話が早いな」と内心ニヤけながらも外面には全く出さずに話すクラウド。

「はい。殿方は私など忘れて他の方に恋して欲しいですし…友人はトラウマになりかねないモノを見てしまったので…」

「ふむ…」

暗闇の雲は何か考え込む。あと一押しだと一気に頼み込む。

「ですから、お願いします。二人の記憶を消して下さい！」

頭を下げる。暫くの沈黙の後…

「…断る。」

「どうしてですか？」

此処まで演技して焦る。

「何故って…お前が得体の知れぬ者だからだ。」

「そんな！私は…」

「…お前、本当はコスモス軍の者である？白状するがいい。」

筒抜けだった。再びの沈黙…

「ふ…」

「どうした？」

「…ふふ。あははは！」

「何が、おかしい？」

急に笑い出すクラウドに暗闇の雲は少し苛立つ。

「ふふ…ああ、スッキリした…」

ひとしきり笑い、涙を拭った後…

「…何だよ。バレてたのか…必死に演技したのにな。」

もう包み隠さず本性を表したクラウド。

「私が記憶消す…と言った時に一瞬喜んでおったからな。気付いて無いと思うが…」

「ちっ！ヤッパリ…コスモス軍だから駄目？」

「ああ…敵だからな。」

キッパリと拒否される意見。

「…同じ“雲”同士仲良くしましょうよ？」

「一緒にするな。まあ我が配下になると言っているのであれば考えなくもない…」

「断る。他の手段を探すでしょう…」

クラウドも自分から提案しときながら一緒にするなと思うし、何より暗闇の雲の配下に成り下がるのが嫌だった。

「簡単に逃がすと思うか？」

「くっ…こ…なったら…」

「？」

「ゴル兄さん、助けて下さい！」

すると…

「喚んだ？」

アレクサンダーよろしくの如く、ゴルベージが二人の間に表れた。

「本当に来た！俺、急いでのので…あの方の御相手をお願い出来ます？」

暗闇の雲を見ながら…

「うむ…ご苦労！解った。行くが良い。」

「有難うな！ゴル兄さん！！」

颯爽と去っていくクラウド。それを呆然と見送りはつと我に返った頃にはクラウドの姿は消えていた。

「…貴様、敵を逃がすとは…無に還してやろう！」

暗闇の雲との戦闘をゴルベーズに任せクラウドは次なる目的地へ…

魔女先生（前書き）

ゴルベージに助けてもらい、暗闇の雲との戦闘を避けられたクラウド。また彼はある事を企む…

～キーワード～

- ・イデアじゃない
- ・占い師？

魔女先生

「もう、記憶を無くす奴が居ないな…俺はどうすれば…」

一生懸命考え…

「待てよ。無くさなくても無かった事にすれば…よし！」

彼はある人物を探す。すると…

「あつた！魔女の部屋か…さっき2回とも演技失敗したし…堂々と条件を言うか…ぶっちゃけ恥ずかしいし…」

クラウドはドアをノックする。

「はい？どなた？」

扉の向こうから魔女…アルティミシアの声が聞こえる。

「どうも、コスモスにお世話になってるクラウドと申します。お願いが…」

「断る。」

間髪入れずに即答する。

「ちよっ…まだ条件言ってない…」

慌てるクラウドを余所にアルティミシアは冷たく…

「ど〱せロクな事じゃないでしょ？ 苦い経験をしたから…その人物の記憶を無かった事にしてくれと？ 違う？」

ズバッと言い当てる。

「あ、当たってる！ 何故解った。」

「ウチの軍にもたまに居るから…何でもソイツは弟の記憶って言うてたかしら？」

（ゴル兄さん！ 何て余計な事を…）

アルティミシアが言い当てたのは前例が居たからであつた。クラウドが内心落ち込みながらもアルティミシアは続ける。

「でも、無駄なのよね〱。仮に封じても何かの拍子で甦るし…多分そのままにしておいた方が良いわよ？ 後からの方が精神ダメージ大きいし…」

「そ…そうですね。」

前回クラウドが口にした台詞を言われてしまつ。

「…私の予想だけど…時間が結構経ってるのであれば…その人達、忘れてんじゃない？」

適当に言っているが、実は正解だったりする。

「そ〱かな？ 忘れてると良いんですけど…」

「案外、大きな物事に出くわすと忘れるモノよ？ もつ、ど〱でも良くなつてたりして…」

大きな物事とはWOLの青鬼事件の事だ。しかし、クラウドもアル

ティミシアもその場に居なかったので知らないはず…流石、時間を操る魔女。恐るべし！

「…解りました。諦めます。…では。」

扉から離れようとするクラウドに…

「待つて。アンタ、ティナを探してんでしょ？」

「え？何で知ってんですか？」

「ああ、アンタの前の依頼者が話してくれたから…もし、見つけたら教えてくれって。」

あっけらかんと話すアルティミシアにクラウドは別の意味で青筋を立てる。

（ティナ…スマン、正直忘れてた。そしてゴル兄さんナイス！）

自分に夢中になりすぎて当初の目的を忘れていたクラウド。だが、此処で有力な情報を手に入れる。

「見てはないけど心当たりはあるわよ。ケフカの所じゃない？アイツ…ティナの事好きだから…」

「有難う御座あます！探してみます。」

見えない相手に礼をし…

「全く、私を変なゴタゴタに巻き込まないで欲しいわよね…まあ、頑張つてらっしゃい。」

こうしてクラウドはケフカの部屋を探す事にした。

番外編：邪魔するな（前書き）

クラウドが去った後のアルティミシアの部屋で…

〈キーワード〉

- ・アルティミシアの密かな趣味
- ・魔女

番外編：邪魔するな

部屋を立ち去っていく音を聞いた後：

「ふう、あの金髪やつと行った。良かった…中入って来なくて…テレビ見よう」

「ふう、暗闇の雲…怖かった！やっと逃げれた。」

何処から入ってきたのだろうか何時の間にかゴルベーザが部屋に居た。

「何故居る？」

「鍵が開いてたから入っちゃった」

ドカ！バキ！！と殴り扉を開けて追い出した後、ボタン！とドアを閉めて…

ガチャ…と、ついでに鍵も閉めた。

この鍵はアルティミシア特製の時間圧縮が掛かっている。つまり次元が違うのでアルティミシア以外に入れない仕組みになっている。

「いやゝ、開けて！また襲われる！！」

扉をドンドンと叩くゴルベーザ。

「勝手に人の部屋に入っておいて何を言うか！」

アルティミシアが怒っていると…

「見つけたぞ！もう逃がさん！！」

暗闇の雲の声が遠くから聞こえてきた。

「ぎゃあああ、来た。助けて！」

ゴルベーザがアルティミシアの部屋の前を去っていた。暗闇の雲も部屋を通り過ぎていき、辺りが静かになったのを確認して…

「やっと静かになった…さて、ドラマ見ようかな。魔女裁判。」

アルティミシアはドラマ鑑賞を始める。アニメなどの所謂魔女っ娘ではなく深夜ドラマのしかもややドロドロのモノを見るのは年齢のせいだろうか？

密かな楽しみを邪魔されたが、何とかバレずに見れたので良かったと思うアルティミシアだった。

番外編：邪魔するな（後書き）

魔女って言うとサリーとかアッコとかが浮かびますが、敢えてコレで。まあ、年齢もね：魔女っ娘って年でも：

ドカ！

さ、流石：年齢が違つと耳まで年m：

バキ！！

ゴメンナサイ。何でもありません：流石は時間圧縮の魔女様。頼みますから、時間圧縮で次元を超えて攻撃するの止めてくれませんか？

被害拡大（前書き）

ようやく本来の目的を思い出したクラウド。ティナが居るであろうケフカの部屋に辿り着いた彼は…

〈キーワード〉

- ・ 初体験
- ・ 誤解
- ・ 憐れみ

被害拡大

「よし、着いたぞ。」

クラウドがドアをノックする。

「はっ…はい。」

少しして声の高い男性…ケフカの声が戸惑いがちに聞こえてきた。

「すみません！コスモスの所のクラウドです。ティナを見かけてませんか？話を聞きたいんで開けて下さい。」

「見かけてませんので他を当たって下さい！」

凄早い早さで否定するケフカに…

「…怪しい。ティナ居るんだろ？開けるよ！」

すると…

「あれ？この声…クラウド？待ってて、今開けるから。」

ティナだ。ドアを開けようとガチャガチャ鍵を開け始める。

「え？今は…お願いだから開けないで！」

慌てて止めようとするケフカに対し冷たく言い放つ。

「は？別に良いじゃない？見られて減るモノでも無いでしょ？」

「気が減るわ！…ダメ、開けないで！！」

ガチャッとドアが開かれた。中にはティナと…

女装をしたケフカが居た。

「あら？どしたの？クラウド…」

黙っているクラウドを見て首を傾げるティナ。

（……。不憫な。）

クラウドは本気で同情し憐れみの目で見える。途端にケフカは泣き始めだした。

「シクシク。」

「いや、暇だったから来ちゃったんだけどさ…何も無くて。ケフカってドレス着れるじゃない？それで暇潰ししてたの。」

如何にも悪気なんて全くありません！…なティナが笑いながら語る。

（暇潰しで此処までやられるとは…）

「クスンクスン。酷いよ…僕、初めてだったのに…」

「誤解を招く発言は避けてもらえる？」

ケフカの“初めて”という言葉に反応し否定するティナ。泣いてるケフカを指しクラウドに意見を求める。

「ねえ、クラウド…貴方から見てコレどう思う？」

「…化粧濃くない？道化師のまま女装したのか？」

クラウドの言う通りケフカの女装はドレスだけであり顔は道化師のままだった。

「だって、化けの皮を剥ぐのを嫌がるんだもの。」

「グス。化粧って言うてくんない？」

ティナの“化けの皮”に反応し化粧と訂正するケフカ。

「ドレスしか着てないからクラウドみたいに完璧じゃないのよ。ああ……」

ティナは完璧に女装を出来ないのを嘆く。そんなケフカを見てクラウドは……

「ピエロ、お前いくらティナが好きだからって……そこまでやらなくても……」

それを聞いたティナは驚く。

「ええ！私が好き？ゴメンナサイ、好みじゃありません。」

「誤解を招かないで！そこ、勘違いしない！！僕が攫ったのは彼女を此方に戻す為だ……！！」

顔を真っ赤にしながら必死に否定するケフカに……

「やっぱり好きなんじゃ……ピエロ、振られたんだから諦める。」

今度は違う意味で同情しだす。

「憐れみの目で見んな！眼球潰すぞ？…だから好きじゃないって！
！くそ、全部破壊だ！！！」

ケフカはクラウドの反応にキレ始めてしまった。

憐れな道化師（前書き）

ケフカ、マジ切れ！

くキーワードく

・毒舌

・ティナ：（女装じゃなかったらカッコ良かったのに…）

・精神口撃

憐れな道化師

「…で？その格好で何を破壊するの？」

ティナが笑いながら残酷な事を呟く。

「ズキン！」

ケフカは精神に1万のダメージを食らう。

「…ぷぷ。自分がまず破壊されてるのにね？」

「ズキン！」

尚も続く精神口撃にケフカは10万のダメージを食らう。

（うわあ、酷っ！）

クラウドはティナの毒舌を受けてるケフカに同情した。

「鏡見てみなよ？破壊力抜群だから？」

「ティナさん。それ以上は…」

敵でも流石に可哀想と思ったクラウドが止めに入るが…

「良いじゃない？コイツ敵だし…それに私が酷い女って思えば諦めてくれるわよ。」

「一部同感。…てか気付いてたんだ。自分が酷いって…」

クラウドは此だけ酷い言葉を吐いたのに自覚あるんだなと思った。

「当たり前でしょ。何処その女神と一緒にしないでよね？」

（プチコスモスが何か言ってる…）

「クラウド、貴方もケフカみたいに破壊しましょうか？」

どうやら心を読まれたようだ。慌てて…

「いえ。遠慮します…」

首を振って否定した。すると…

「…ウフフ。」

ケフカが気味の悪い笑い声を発した。

「？」

「！」

ティナは分かっただけでクラウドはケフカを見てハツとする。

「…ククク。あっはははは！」

笑いがドンドン大きくなりティナは混乱した。

「何？何が起きたの？」

（…ああ、とうとう壊れた。まあ当然か…ティナは気付いてないけど精神ダメージ大だもんな…）

クラウドはそろそろ壊れるだろうと感付いていた。

「…アハハ。全部破壊してやる！お前も、お前も。我が軍に入れようと思ったがもう良い。お前なんか要らない！！」

涙を流しながら笑い続けるケフカはティナに魔法で攻撃しだした。

「きゃあああ。」

「まずはお前からだ！僕を辱めた罪を思い知るが良い！！」

「だから、誤解を招かないでよ！…こっち来ないで！！」

魔法を避けようとするティナ…

「ティナ！」

「クラウド、助けて！」

クラウドはティナの元に駆け寄りケフカの攻撃を止める。

「大丈夫だ。ティナ…アンタは俺が守る。俺から離れるな。」

「…はい。」

ちよっただけ頬を染めるティナ。

「という事で、ティナには指一本触れさせない！かかって来い。変態。」

「アハハ。私のティナを奪いやがって！貴様許さんぞ！！」

クラウドvsケフカのバトルが開始された。

二人はラブラブ（前書き）

ケフカ、壊れる。

くキーワードく

- ・ 保護者クラウド
- ・ 我が儘姫ティナ
- ・ 35歳児

二人はラブラブ

クラウドvsケフカのバトルが始まった。

「お前なんか、武器無くても十分だ。さっきの技磨きのお陰で攻撃に慣れたしな。」

後ろにティナを庇いながらもクラウドが挑発する。

「あまり嘗めるな…小僧！私の恐ろしさを知るが良い！！ほら！！！」

挑発に乗ったケフカは早速、魔法で攻撃してきた。

「ティナ、危ないから下がって。」

「嫌〜！」

首を横に振りながら拒否する。

「我が儘言わないの！ほら攻撃…魔法来てるから！！！」

氷の魔法がゆっくりと此方に近付いてくる。

「だって！離れるなって言っただじゃない。」

文句を言いながら背中にピッタリとくっ付きクラウドの腕をギュッとするティナ。

「言いましたとも。でも、今は攻撃が加わるから下がって！」

軽く手を動かし振り払おうとするがビクともしない。

「あんなへボいのクラウドなら避けれるわよ！」

「俺ならな！お前が避けられないかもしれないから言ってるのー！」

「私、か弱いから無理。」

そんなに、か弱く見えないというか図太いとクラウドは思う。

「色々、ツツコミたいが置いてこう。…アンタは俺の邪魔をしたいのか？」

クラウドが困ったように聞くとブルブル震えながら泣きそうな声で…

「私…私、邪魔な女だったの？」

「そう言ってるんじゃない！…ったく、ほらー！」

クラウドはティナをおんぶして攻撃を避ける。

「お姫様抱っこが良い！」

ティナは背中で暴れながら抗議する。

「我が儘を言うんじゃないやありません！いい加減、振り落とすぞ？」

「ぷー。」

頬を膨らませ怒るティナにクラウドは溜め息を吐く。

「ハア…解った！後で思う存分してやるから今は我慢してくれ。良いな？」

「…はい。」

ティナは渋々、了承した。

「さあ、ピエロ！仕切り直しだ！お前なんか足で十分…」

台詞が途切れたのはケフカの様子がおかしいからだ。

「あれ？泣いてる？」

「泣いてないもん！悔しくないもん！！羨ましくないもん！！！」

泣きながら訴えるケフカに…

（悔しいんだ。羨ましいんだ。）

「ちくしょ！ラブラブなんか壊してやるゝ！！」

地団太踏みながら二人を指差し宣言するケフカにクラウドは多少の罪悪感が湧いた。

「……。何かスマン。」

こうして戦いは第2ラウンドへ突入した。

協力プレイ（前書き）

人をおんぶしながら戦う戦士が此処に…

〈キーワード〉

実際は協力プレイはありません

協力プレイ

戦いの最中…

「なあ、ティナ？」

「何、クラウド？」

「悪いけど…やっぱ下りて。足だけじゃ無理。」

手はティナをおんぶしているので動かせない。当然、足だけで戦うクラウドは限界だった。

「まあ！私がデブだと言いたいのか？」

「違う！このままじゃ共倒れするし…」

ティナ自体は軽い…が、やはり普段は剣で戦うクラウドには手の方が慣れていた。

「でも、ティーダのお父さんは足技で敵を倒してるわよ？スコールだって足蹴にする技があるし…」

「いや、戦闘スタイルだから…あれ。一緒にするな。」

「じゃあ、バツツみたいに物真似したら？」

「俺、ものまね士じゃね？よ！無茶な注文するな！！」

だがバツツも敵を足蹴にする技など持ち合わせていない。

「ぷ！さつきから全部ダメダメって私の意見も聞いてよ！！」

「聞いているから！無理な事ばかり言うからでしょ！！あ、もう解った。」

溜め息を吐き…

「な…何よ？」

「おんぶはしてやる…でも、サポートはしてくれ。それなら出来るよな？」

本当にしてくれるかどうかは分からないが提案してみる。

「…うん。解った。」

やや迷いつつも渋々了承するティナにクラウドは気を取り直しケフ力に向かって攻撃の準備をする。

「よし、行くぞ。」

反撃開始。

「何度やつても同じですよ？諦めて死んではどうです？」

「うるせえ！ティナ、攻撃を！！」

「はいはい。」

ティナは二つ返事で相槌を打ち攻撃魔法を放ったが…

「…ティナさん、何で俺に攻撃するのかな？」

何故か味方の筈のクラウドに攻撃が当たる。

「あ、ゴメンナサイ…前見えないから間違えちゃった」

絶対ワザとだ。だって、笑ってるし…

「お前は〜！」

悪気ゼロのティナに怒るクラウド。

「仲間割れか、チャンス　じゃあね！」

言い争いをしている最中にケフカが二人に向かって攻撃をしてきた。

「うわ、やべえ。攻撃が…避けられない。」

「はあ！」

焦るクラウドをよそにティナがまた魔法を放った。

「…何で？俺に当たった？」

今度はキチンとケフカを攻撃している。

「クラウド“姐さん”に攻撃して良いのは私だけよ？アンタじゃない。」

ドSなティナの攻撃云々より気になる発言がクラウドの心の中で反響している。

（姐さん！姐さんって今言った？）

見事、ケフカを倒したティナであった。

次回、最終回。

協力プレイ（後書き）

この中でクラウドが一番精神的に大人です。そして不幸かつ苦勞人です。

次回いよいよ本編が最終回です。

これで最終回（前書き）

ティナがケフカを倒した。

くキーワードく

・抱っこ

・本編終了

これで最終回

ケフカを倒し城を出た二人。

「じゃあ、約束通り。お姫様抱っこ」

ティナがピョンピョン跳ねながらクラウドに抱っこを催促をする。

「はいはい。」

ティナを抱き上げるが…

「はい抱っこ。帰るっか？」

数十秒だけし直ぐに地面に下ろす。

「こんなの抱っこの中に入らないわよ！コスモス地域まで抱っこ！！」

「恥ずかしい事言っな〜！誰かに見られたらどうすんの？もしかすると百合って思われるかもしれないじゃないか！！」

女装中なので遠目から見ると逞しい女性が華奢な女性を抱き上げてるように見えなくもない。

「大丈夫！その時は私がクラウドってバラすから！！」

「どっちにしても茨！…俺、カオスに従おうかな…」

コスモスといいティナといい秩序組の女性はこうもどうして性格が

非道いのだろうか。クラウドは本気で混沌組に鞍替えしようかと思
った。

「そんな事したら今、此処で始末するわよ」

魔法を手に持ちながらティナが脅す。

「じよ、冗談だつて…嫌だな。」

青筋を浮かべながら先程までの考えを打ち消すが如く首を横に振る。

「良かった」クラウド姐さんを始末するなんて私には出来ないも
の…」

魔法を消し笑顔で言うティナ。

（本気で始末しようとした癖に…）

心の中でツッコむが口に出したらそれこそ始末されるので黙ってお
く。話はまた戻り…

「さあ帰ろ？抱っこー！」

「…あのな、いい加減に…どした？」

見るとティナが座り込み足をさすっている。

「…あ、足が…足が痛い。ああ…このままじゃ私帰れない。」

（そこまでされたいか？お姫様抱っこ…）

「抱っこ！抱っこー！！」

抱っこコールをし出すティナにクラウドは呆れ…

「解った。ただしカオス地域の出口までな？」

その提案に不満そうなティナだったが渋々了承する。

「むゝ！解ったわよ。それで良い！！」

クラウドが抱っこしながら帰つてると…

「…助けてくれて有難うね。」

小さな声で礼を言うティナ。

「ああ。当たり前だろ？仲間なんだから。」

「そっか…あと初めに酷い事を言ってゴメンね？」

「気にすんな。俺も悪かったし…」

「…カッコイイな。ちえ！」

クラウドに聞こえない位の小さな小さな声で誉める。

「何か言ったか？…うん？寝てる。」

腕の中で安心したように寝息を立てる彼女に、やれやれと溜め息を吐き…

「ふう…仕方無い、お姫様を抱っこしてコスモス地域まで帰るか…」

こうして、ティナを奪還したクラウドはコスモス地域まで帰っていた。幸い誰とも会わず事無く帰る事に成功した。

そして、彼らはそれぞれの宿敵と戦い自分達の世界へ帰ったのであった。

めでたしめでたし。

これで最終回（後書き）

これで本編終了です。此処まで読んで下さった方…本当に有難う御座います。

終わり方が変で申し訳ありません！どう書いたら良いか分からなくて…

取り敢えず次回は後書きという名の解説（？）をしたいと思います。

あとがき

どうも僕です（有田風）。

此処まで読んで頂き本当に有難う御座います。最後まで拙い文章でスミマセン。

このお話は元々ニコニコ動画を見てて思い付きました。私もこんな風に出たらな…しかし！残念な事に私は絵がド下手なのです。なので絵が駄目なら文章にしてみれば良いじゃない…と書いたのがキツカケです。

初めはキャラの台詞と簡単な文章だけでした。で、違うサイトでそのまま載せたのですが…不評でしたorz

その数ヶ月後に此方のサイトを知りある程度書き直しつつ投稿してみました。アクセスがあり読んで貰って嬉しいです。お気に入りも登録してもらいましたし…感動です

（爾 爾）

本当に有難う御座いました。

次回はキャラ考察について語ります。

キャラ解説

さて、キャラについて語りしたいと思います。まずは秩序組から…

・コスモス

秩序組の神。この物語で一番性格が変わった人。そして全ての元凶。厳しさを通り越して外道でカオスより混沌。いったいどうしてこうなったのやら…

・WOL

秩序組のリーダー。コスモスの次に偉いはずが…二番目に性格が破綻した人。人の軸ブレまくりw

・フリオ

よく悲惨な目に遭うのは作者からの愛。バッツに倒され酒に吞まれ…可哀想にw

・ネギ

秩序組で最年少。頭が良いので小憎たらしい台詞が目立ちます。

・セシル

味方に優しく敵に厳しい…敵にしたいくないキャラNo.1。腹黒。兄が嫌い。まああんな事されれば嫌うよね…

・バッツ

通常運転。酒の話だけ寄り道…まともな彼も見たいかったので。

・ティナ

初めはあんな娘じゃなかったのに…いつの間にかプチコスモスに。

余談ですが作者はゲームの性格が暗いのであまり好きじゃない。

・クラウド

この物語の主人公。なのに不幸。終始女装の青年。某イベントでは頑張つて最高級のカツラなど集めたのは良い思い出…

・スコール

FF10のアーロンと中の人が同じなのか皆に老けてるだの実は18歳だの色々な所からツッコまれる可哀想な少年。ゲーム中では20歳児に振り回されますw

・ジタン

第2部の主人公。だがクラウド同様非道い扱い。ゲームでは盗賊で集団行動に馴れてるせいか保護者っぽい。

・ティーダ

KY? 出番少なくてゴメン。短編でもあんな事言つてゴメン。書く事あまり無くてゴメン。

・シャントット

年と背を気にしてるので絶対言わない事。ゲーム中ガブラス同様にもっとストーリーが欲しかったな…

続いて混沌組です。

・カオス

混沌組の神。過去編以外に出番が全く無いが少なくともコスモスより良い人。

・ガーランド

混沌組のリーダー。WOLと戦いたくて戦いたくて仕様が無い。

・皇帝

気が付いたらクラウドのデコイにされ拳げ句裏切られる。

・暗闇の雲

痴女。だが物語で言ってる事がマトモなのは彼女だけだったりする。

・ゴルベージ

紳士という名の変態。ゲーム中のカッコ良さなど微塵も無い。

・エクスデス

先生。作者もゲーム中に技磨きなどお世話になった。しかし本気を出せば強い。

・ケフカ

精神破綻者その1。一見ちゃらけてるが言ってる事は的を獲ている。

・セフィロス

精神破綻者その2。お前ただけクラウドと言っただって位クラウドが好き。遂にはストーカーにまで成り下がった人。

・アルティミシア

性格が何となく良さに…年は気にしてるので話題は禁句。

・クジヤ

変態露出狂。ジタンに執着するがセフィロスほどでは無い。身嗜みさえ直せば良くなると思う。

・ジエクト

混沌組の良心。ティードとは親子だが仲が悪い。息子を大切に思っているが不器用な為、上手くいかない… ちょいワル親父。

・ガブラス

負け犬というか自分を卑下する人。シャントットより出番が少ない…

・シド

ナレーター。各シリーズには自分と同じ名前の人が居るが別人。アンケート編では司会者。

…感じですかね？長々と失礼しました。

アンケート└─カオス編┘（前書き）

ここから短編に入ります。

└─キーワード┘

・腕

・カオス

アンケート〜カオス編〜

「皆さん、お久しぶりです…え？誰かって？私は…」

「おい、シド…早くするが良い。我は次回作で忙しいのだから！」

カオスが急かす。

「…。そうだな。では始めようか…DISSIDIAファンの皆様、お待たせいたしました！本日は混沌組の神…カオスさんに来て頂きました。」

パチパチと手を叩き…

「我が名はカオス。混沌を司る神だ…宜しく。」

「さて、前はコスモスさんのせいで滅茶苦茶になりましたが…今回は大丈夫ですよね？」

「あの女神と一緒にするな…我はアレよりかはマシだ。」

コスモスと比べれたカオスはやや腹を立てる。

「そうですね…じゃあ早速カオスさんの採用理由です！」

前回同様にホワイトボードが表れ…結果がビッシリ書かれていた

ガーランド：バトル馬鹿

皇帝：世界征服は男のロマンを感じた

暗闇の雲：セクシーだしもしかすると色香でだませるかも（敵を）

ゴルベーザ：兄弟喧嘩

エクスデス：やられ役兼指南役

ケフカ：ムードメーカー

いか：非常食

アルティミシア：魔女っ娘ってファンタジーに必要なよね？

クジャ：詩人かと思つて間違つて採用しちゃった

ジエクト：親子喧嘩

犬：ペット

「…。」

シドはボードを見て絶句した。

「どうだ？ちゃんとした理由だろ？」

「何処が！何か2人だけあだ名だし…それにセフィロス食べないから！！」

「え？あれはイカだろ？」

「確かに7のラストとかニコニコ動画でBUMP OF CHIC KENのいかの歌のMADあつたけど…違うから！」

一気に喋りハアハアと息切れするシド…

「ハア…では次にカオスから見た秩序組の感想です。」

別のボードが出てきた

WOL：我がライバル

フリオニール：ターバン巻いたお洒落さん

オニオンナイト：小さき者

セシル：闇使うのになんでそっち側にいんの？

バツ：我も真似してくれないか？

ティナ：どうして離れちゃったの？

クラウド：いかに負けるな

スコール：もつと喋れ

ジタン：兄より賢いね

ティード：父親奪ってゴメン

シャントット：性格破綻者

「何か…ティナに対して未練タラタラじゃないか？」

「我が軍のヒロインかつエース だったからな… 本当何で離れたのやら…」

（お前がセクハラするからだろ。）

シドはティナの話題から変えてバツツの理由に注目してみた。

「あの…言にくいだが、体型的にバツツは物真似出来ないと思うぞ？」

「分かっておる。腕が足りないし…しかし、スコールやジタンに頼めば出来るだろ？」

「いや、無…」

“無理”と言おうとしたが、途中遮られて…

「CHU・CHU train。」

「EXILE！お前の物真似じゃないのかよ！！」

またしてもツツコミに息を切らすシド。

「ふう…。じゃあいよいよ混沌組から見たカオスの方を見て見るか。」

げんなりしながらも続ける。 前回コスモスの時に身内の理由を先に

見せた為に大暴れして時間を割いたので今回は変えてみた。
「うむ。楽しみだ!」

上司として自信満々のカオスの前にボード登場

ガールランド：貴方は私

皇帝：貴様を滅ぼしてこの世界を征服してやろう

暗闇の雲：マントと翼が被る

ゴルベージ：体格はどっちが上かな？

エクスデス：私を無に還せ

ケフカ：破壊万歳

セフィロス：どうでも良い

アルティミシア：何で皇帝の秘書っぽいポジションなんだろう？

クジャ：僕は自分とジタンだけさ

ジェクト：何故俺こっちに來たんだろ…

ジャッジ：くだらん戦いに巻き込むな

「秩序組も回答凄かったです、負けてませんね…」

「流石、我が部下たち。」

「そ…そうだな。まさに混沌だな。」

「ははは。巧いなシド!」

カオスは駄洒落に大爆笑した。

（もつ…嫌。この神共…）

シドはウンザリした。

「いよいよ最後です。秩序組から見たカオス。」

最後だというのに投げやりになるシド。ボード登場

WOL：コスモス（妻）を奪われた

フリオニール：何か皇帝に禪が似てる

オニオンナイト：手がいっぱいあって便利そう

セシル：兄さんと体格被る

バツツ：腕がいっぱいあって不便そう

ティナ：昔はお世話になりました

クラウド：興味無いね〜

スコール：どうやったらあんなに育つのやら…

ジタン：隣に並びたくない

ティーダ：親父を奪われた

シャン：カスオ

「感想は？」

シドが投げやりな質問を出す。

「腕はいっぱいあると便利だぞ。しかし…」

「？」

「ティナちゃん、昔って…」

泣き始めるカオスを無視して…

「（ああ、ウザイ。）では、カオスさんが泣いてしまったようなので今回はこの辺で…次回は新キャラ参戦についてレポートしたいと思う。」

「うわ〜ん。」

シドは泣いてるカオスをその場に残し去っていた。

アンケート〱カオス編〱（後書き）

話に出てきたニコニコ動画ですが、大爆笑しました。その内、オススメ動画を紹介したいです。

もしもコスモスが…（前書き）

プレイヤーキャラだったら？

くキーワードく

・ 鬼畜なコスモス
だが事実

実際こんなバトルはゲーム中ありません

もしもコスモスが…

コスモスvsセフィロスのバトルスタート。

「行くぞ…」

先に仕掛けたのはセフィロスだった。コスモスに向かい攻撃をするが余裕で避ける。

「おのれ…女神の癖にチヨコマカと…」

「何ですって？」

セフィロスの言葉にカチンと来たコスモスは刀を両手で抑え…攻撃を止める。

「なっ…馬鹿な！動かないだど!!」

「ふん！私は神よ。神に刃向かった事を後悔させてあげるわ。有難く受け取りなさい!!」

まずは精神から攻撃をし始める。

「まあ、ジェノバが母親と思ってる時点で頭おかしいわよね？あ、ゴメンなさい。悪気は無いのよ。ただ、あんな素敵なお母さん（ルクレツィア）居るのにそう思うと貴方が哀れだなんて思って…」

と笑いながら言うコスモス。

「き、貴様！」

怒るセフィロスなどお構いなしに続く精神攻撃。

「でも仕方無いわよね？父親（宝条）がアレじゃあ頭も悪くなるわよね。ていうか昔は母親似だったのに…今ではすっかり駄目人間な父親似ね？」

「…。」

精神攻撃が効いたのか黙り込むセフィロスに更なる追い討ちを掛ける。

「オホホホ…遠慮無く喰らいなさい。」

遠距離で魔法を唱えて近距離でロッドでタコ殴り。

EXは神の慈愛で愛という名^{だけ}の暴力でセフィロスを討ちのめす。

「畜生…」

見事セフィロスを倒したコスモスは…

「女神の私に勝てると思ってるの？甚だしいったらありやしないわ！忠告するわ…もう二度と私（神）に逆らわない事ね。オホホホ！」

腰に手を当てシャントットのように高笑いをしながら決め台詞を言うコスモスだった。

こうしてバトルはコスモスの勝利で幕を閉じた。

もしもコスモスが…（後書き）

誰もこの女神には逆らえませんでした…勿論、カオスも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4609m/>

クラウドの受難

2011年3月8日15時44分発行